矢源田窯跡

波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び
県道大田・井田・江津線付替え工事に伴う文化財調査報告書

2003年3月

島根県浜田河川総合開発事務所
江津市教育委員会

矢源田窯跡正誤表

位置	誤	正
本文21ページ　15行目	2は波積町にある福城寺の長門に葺かれていた瓦で、文化年間(1804～1817年)の赤瓦である。	2は波積町本郷にある福城寺の山門に葺かれていた瓦で、文政年間(1818～1829年)の赤瓦である。

序

このたび、波積ダム建設に伴う集団移転造成工事及び、県道大田・井田・江津線付替え工事に伴い、瓦窯跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

石見焼発祥地と考えられている江津では、古くから都野津層により良質の粘土がとれた為、約２００～３００基の窯があったと言われております。最盛期には至る所で登り窯を焚く煙がみられていましたが、現在ではオートメーションで瓦を製造しており、登り窯で瓦を焼く所はなくなりました。

石州瓦は、来待釉の赤い釉薬が印象深く、江津の町では赤い光沢を放つ美しい軒並みがみられます。硬く焼き締められた石州瓦は、塩害や凍害に強い特色から、北陸などの寒冷地で使われ、やがて中国地方や九州地方への販路を広げ、江津市を代表する一大産業にまで発展しております。

今回の報告が江津市の窯業史に対する関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご協力を頂きました地元の皆様や浜田河川総合開発事務所をはじめ、関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

江津市教育委員会
教育長　**野上　公司**

例　　言

1．本書は島根県浜田河川総合開発事務所が実施した、波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び、県道大田・井田・江津線付替え工事に伴い平成14年度に江津市教育委員会が実施した石州瓦窯跡の文化財調査報告書である。

2．島根県浜田河川総合開発事務所の委託により江津市が実施した。

3．調査体制は次のとおりである。

事務局　江津市教育委員会

平成14年度	野上　公司	教育長
	岩田　春正	生涯学習課長
	藤田　美恵子	同　課長補佐
	林　正司	同　係長
調査担当	梅木　茂雄	同　主事
事務補助	福本　和世子	同　嘱託員
調査補助	澤津　孝	同　臨時職員
調査補助	恒松　明宏	同　臨時職員（平成14年12月まで）
調査補助	佐々木　渉	同　臨時職員（平成15年１月～４月）
調査協力者	石山広重、上本忠行、大野初恵、熊野操、郷原治、坂村昇平、高橋則明 竹内正忠、槌井信子、永見義隆、野沢淳、松島眞直、松原標倪、 山崎加津栄、山下幸子、無川美和子、山田ゆう子、藤本淳子、上野由美恵	

4．現地調査、及び資料整理については、色々な方から有益なご助言をいただいた。島根県教育委員会文化財課、浜田市教育委員会、築窯師　嶋田俊文氏、三國靖夫氏、益野敏雄氏、嘉戸秀樹氏、アメックス協販、今崎窯業、ヨーケン
報告書の作成は、梅木の指導の元、主に澤津が行った。

5．報告書の作成は以下の者が携わった。（五十音順）
上野由美恵、梅木茂雄、上手文子、鹿森三鈴、佐々木渉、澤津孝、
恒松明宏、藤本淳子、無川美和子、山田ゆう子

6．報告書記載の遺物・図面・写真等は江津市教育委員会で保管している。

参考文献

島根県教育委員会	2001年	「飯田Ａ遺跡・長東坊師窯跡」「石見焼関連遺跡調査報告１」
島根県教育委員会	2001年	「上府八反原窯跡(佐々木窯跡)」「石見関連遺跡調査報告２」
島根県教育委員会	2002年	「大田屋窯跡」「石見焼関連遺跡調査報告３」
島根県教育委員会	1992年	「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」
島根県教育委員会	2002年	「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」
益田市教育委員会	1996年	「益田拠点工業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
益田市教育委員会	1996年	「益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
江津市教育委員会	1991年	「田室窯跡発掘調査報告書」
江津市教育委員会	1992年	「平成３年度埋蔵文化財調査報告書」
江津市編纂委員会	1982年	「江津市誌　上巻」第１節　工鉱業　第三章　第二次・第三次産業
江津市編纂委員会	1982年	「江津市誌　下巻」第１節　商工業の展開と発展　第７章　商工業の発展と農林漁業の推移
江津市文化財研究会	1986年	「石見潟　第十・十一号　江津市の窯と窯跡」
江津市文化財研究会	1988年	「石見潟　第十三号　石見焼(丸物と瓦)」
浜田市商工水産課	1953年	浜田の窯業
宮野秋彦	1986年	屋根叢書３「雨漏りの話」
小林章男	1990年	屋根叢書４「生きている鬼瓦」
宮野秋彦	1992年	屋根叢書５「古代日本の屋根」
石見陶器工業共同組合	1999年	「伝統的工芸品　石見焼　手引書」
石州瓦工業組合		「屋根の設計・施工　石州瓦標準施工マニュアル」
石見陶器工業協同組合	2000年	「伝統工芸品「石見焼」手引書」
石州瓦工業組合	2001年	「石州瓦工業組合40周年記念集」
三國靖夫	2002年	「石州瓦窯誌」
理工学社	1976年	「日本の瓦屋根」
新人物往来社	1975年	「日本の郷土産業　５　中国・四国」
鶴田真秀	1972年	「石州瓦史」
平田正典	1996年	「築窯四代記　抄」
平田正典	1996年	「石見粗陶器史考」石見地方史研究会
内藤正中	1997年	「図説　島根県の歴史」河出書房新社
森本幸治	1952年	「都野津町瓦工場図録」(江津市立図書館　所蔵)
井澤洋一		「福岡市博物館研究紀要５」筑前における中近世瓦の分類試案(上)
八雲立つ風土記の丘 No.122・123	1993年	「石見地方における近世の窯業生産」

本文目次

序
例言
参考文献
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　位置と歴史的環境……1
第３章　調査結果……5
　第１節　調査概要……5
　第２節　窯周辺の状況……5
　第３節　操業の様子……6
　第４節　窯体の調査……9,10
　第５節　房内の構造……12
　第６節　遺物……15,18
第４章　まとめ……20,21
都野津町瓦工場語録　石州瓦図譜……一～七

挿図目次

第１図　江東地区窯業跡遺跡　S＝１/40,000・1/20,000……2
第２図　矢源田窯跡調査前地形測量図　S＝１/500……4
第３図　登り窯平面・土層図　S＝１/100・1/40……7,8
第４図　大口・寄窯・フカセ・煙突の構造　S＝1/40……11
第５図　房の構造　S＝1/20……13,14
第６図　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図１　S＝1/6……16
第７図　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図２　S＝1/6……17
第８図　「都野津町瓦工場語録」掲載イラスト……21
第９図　石州瓦基本構成（現代）……21
第10図　市内瓦当拓本一覧　S＝1/4……22
第一図　都野津町瓦工場　石州瓦図譜　森本幸治……七

表目次

第１表　江東地区の窯、窯跡一覧表……3
第２表　登窯計測表……7
第３表　房内名称……13
第４表　矢源田窯跡　出土遺物観察表……19

写真図版目次

写真図版１　登窯全景（正面から）
写真図版２　上：波積町本郷遠景
　左下：調査前登窯（正面から）
　右下：登窯完堀
写真図版３　上：５房目（正面から）
　下：登窯（正面から）
写真図版４　左上：登窯通路（大口付近から）
　右上：登窯通路（７房付近から）
　左下：窯北西側礎石（北西から）
　右下：７房小口前作業場（南から）
写真図版５　上：９房～煙突（南から）
　下：８，９房裏側（北から）
写真図版６　上：大口正面
　下：大口火格子穴
写真図版７　上：大口粘土検出状況
　左下：２房縮小前
　右下：２房縮小後
写真図版８　上：６房焚庭奥壁
　左下：10房小口
　右下：９房内（奥から）
写真図版９　左上：９房内（小口から）
　右上：９房内調査前（奥から）
　左下：９房甲端部組み方
　右下：11房甲内側
写真図版10　上：11房露抜き穴
　左下：煙突（西から）
　右下：煙突、フカセ（南から）
写真図版11　上：煙突下、炭掻き出し穴
　下：フカセ内部
写真図版12　上：白地小屋跡（南西から）
　中：職人の宿舎跡（北東から）
　下：物原壁（北東から）
写真図版13　上：大口土層
　中：土層２
　下：土層４
写真図版14　上：益野家屋根
　中：益野家瓦
　下：登窯作業風景
写真図版15　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物１
写真図版16　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物２
写真図版17　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物３
写真図版18　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物４

第１章　調査に至る経緯

１．江津市教育委員会は、島根県浜田河川総合開発事務所より平成12年1月31日付けで都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に係る埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての照会を受けた。

２．江津市教育委員会は、平成12年6月28日付け回答で、周知の遺跡である矢源田窯跡は調査の必要性があるため、協議を要す旨回答した。

３．協議の結果、島根県浜田河川総合開発事務所と江津市教育委員会は平成14年5月27日付け都治川治水ダム建設事業（波積ダム）文化財調査委託契約を締結。江津市教育委員会が事務局となり、平成15年3月20日まで矢源田窯跡調査及び報告書作成を行なった。

第２章　位置と歴史的環境

江津市は中国山地を貫流し日本海に注ぐ江の川により、江東地区と江西地区に分かれている。江の川は昔から物資の輸送が盛んで、川沿いではタタラ場や木炭の産業が栄えていた。石州瓦の始まりは元和５年（1619年）浜田城築城の為に大阪より瓦師を招き、御用瓦として焼かせたのが始まりと言われている。この頃の瓦は平瓦と丸瓦の本瓦で、藩関係の建築物、神社佛閣、庄屋などの有力者の家屋等で使用されており、一般庶民には無縁のものであった。延宝２年（1674年）大津の瓦工が本瓦の丸瓦と平瓦を一体化させた桟瓦を考案した。浜田藩では寛政３年（1791年）、享和元年（1801年）、文政年間（1818～1829年）の３回にわたり瓦葺きを禁止制限する通達を出している。石州瓦が一般庶民に普及するのは江戸時代末期頃であった。釉薬瓦の緒言は小川家文書の寛政５年（1793年）に油瓦として記載されている。

明治・大正時代になると日本海沿岸に鉄道や国道９号線が開通し、輸送経路が拡大した事により物資の輸送が容易になった。その為、駅の周辺や国道沿いなどで産業が栄える様になった。江津市周辺では都野津層と呼ばれる良質の粘土がとれる為、窯業最盛期には100基以上の窯場があった。

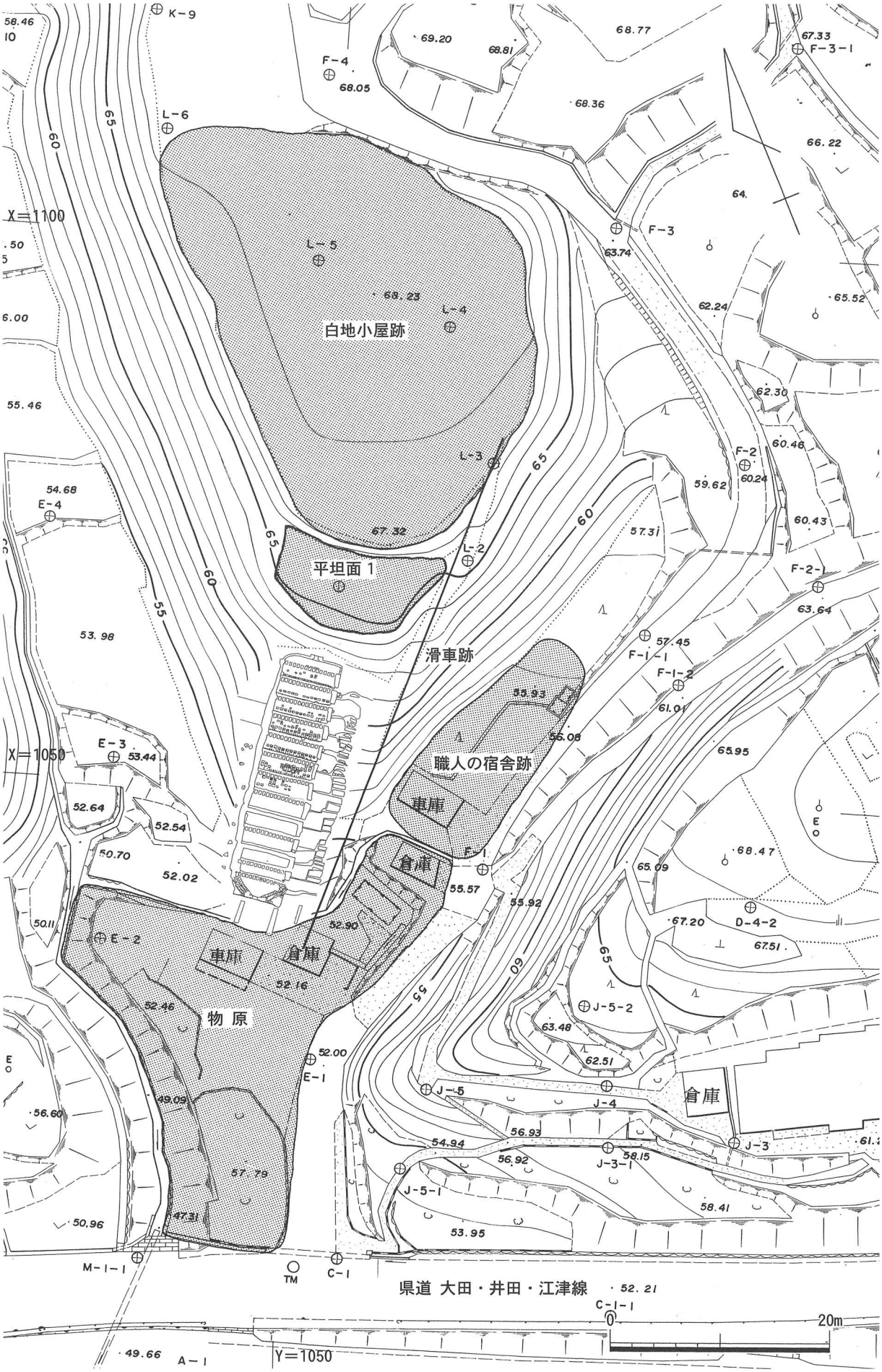
第二次世界大戦に入ると窯場は休業せねばならず、また戦時中の乱伐とパルプ工場の進出による森林資源の不足で登窯の燃料である松が高価になり、燃料転換せざるを得なくなった。昭和28年登窯に替わって重油を燃料とするトンネル窯が県内で初めて石州瓦都野津協同組合で導入された。トンネル窯は大量生産、高品質、オートメーション化によって労力、経費ともに優れ、登窯に比べると８倍の量が生産されコストも３割安くなり、登窯で瓦を作る所は徐々になくなっていった。現在では登窯で瓦を焼く人はいなくなり、石見焼きは民芸陶器として残っている。

第１図　江東地区窯業跡遺跡　Ｓ＝1/40,000・Ⓐ拡大地図1/20,000

第１表　江東地区の窯、窯跡一覧表

	名　　称	所 在 地	創 業	規　模	廃 業	概　　要
1	迫田窯跡	波積町　本郷	Ｓ22年		Ｓ24年	
	木田窯跡		Ｓ24年		Ｓ33年	井田でも１基借受け
	矢源田窯跡		Ｓ33年	12房1基	Ｓ39年	
2	浅野窯跡	都治町　下都治102	Ｓ30年	６～７房１基	Ｓ37年頃	
3	佐々木共同窯跡	波積町　北	Ｓ28年	10房１基	Ｓ35年頃	佐々木亀之助氏､森田清重氏､山藤茂氏の共同出資で新設。
4	柴田窯跡	波積町　北	Ｍ上旬	８房１基	Ｔ上旬頃	
5	十尺窯跡	波積町　北	Ｍ中期～Ｔ末期頃	７房１基		
6	杉野窯※	波積村				文化10年　（山藤　忠文書より）
7	素治朗窯跡※	波積村				明治４年　（鶴田　眞秀文書より）
8	阪野窯跡	浅利町	Ｍ17年			丸物
9	西山窯跡※	浅利町	Ｍ16年			丸物
10	山城窯跡	浅利町　駅前			戦中	丸物
11	浅利窯業組合窯跡	浅利町　駅前				丸物
	吉村窯跡					浅利窯業組合窯戦後買取、瓦
12	木村窯跡	浅利町	Ｓ28年			瓦窯新設創業
13	島田窯跡	浅利町		ダルマ窯2，3基		素焼き黒瓦を焼成販売
14	平岡屋窯跡	浅利町　駅前	Ｔ７年		Ｓ９年	丸物
	森口窯跡		Ｓ９年			平岡屋窯買取、丸物
15	岡田窯跡		戦後		Ｓ30年	戦後丸物窯開設
	(有)横路窯業所窯跡		Ｓ30年		Ｓ58年	瓦窯改修、Ｓ42年トンネル窯に移行
	浅利窯業所		Ｓ58年	ガス窯７基		横路窯買取り
16	浅利窯業会社窯跡	浅利町　166-2		瓦窯２基	Ｓ３年	石州陶苑に譲る
	石州陶苑(有)		Ｓ３年			浅利窯業会社瓦窯２基買入れ創業
17	田中窯跡	後地町　藪	Ｔ年間			瓦
18	佐々木利夫窯跡	後地町　松井	Ｔ14年	５房１基	Ｓ30年頃	鉄砂瓦生産
19	松尾屋窯跡	後地町　藪3171			Ｔ12年	不詳
	甲野屋窯業所		Ｔ12年			松尾瓦窯買受け、丸物生産。昭和29年瓦窯増築
20	石州鬼瓦工業(有)	後地町　3133-1	Ｓ62年	ガス乾燥炉３基		
21	古川共同窯跡	後地町　藪	Ｔ初期	14房１基	Ｓ10年頃	古川吾市、古川繁市、島田梅市の三人で創業
	嶋田窯跡		Ｓ10年			古川共同窯買取、丸物窯に改修戦後、民陶
22	古川窯跡	後地町　藪2451	Ｔ10年	13房１基	Ｓ45年頃	瓦と丸物。
23	近江窯跡	後地町　藪1318				
	川下窯跡		Ｔ６年		Ｓ56年	近江窯買取瓦窯に改造創業、瓦
24	三福屋窯跡	後地町　藪	Ｓ初期	15房１基	Ｓ22年頃	
	鎌田窯跡		Ｓ22年			三福屋窯買受け創業。
25	山下窯跡	後地町藪2501	Ｓ29年			昭和39年瓦窯に改造、初窯は鉄砂瓦を焼く
	石見秀山焼窯元					現在は民芸陶器
26	升野窯跡	後地町　藪	Ｔ６年			丸物、戦後民陶
27	山中窯跡※	後地町　藪			Ｓ45年	丸物
28	大庭窯跡	松川町　太田	Ｔ年間	14房１基	Ｓ23年頃	丸物
	横田窯跡	浅利町　浅利谷345	Ｓ23年			大庭窯買取
29	花田窯跡	松川町　太田	Ｍ初期			丸物
	西川窯跡					花田窯買取、丸物
	有田窯跡				Ｔ初期	西川窯買取、丸物
	野沢窯跡		Ｔ初期		Ｔ３年	有田窯買取、丸物
	湊窯跡		Ｔ３年		Ｓ５年	野沢窯買取、丸物
	佐々木窯跡		Ｓ５年		Ｓ７年	湊窯買取、丸物
	井上窯跡		Ｓ７年			佐々木窯買取、丸物
	本田窯跡				Ｓ25年	井上窯買取、丸物
	大場窯跡		Ｓ25年		Ｓ34年	鉄砂瓦の後、来待瓦生産
	佐々木俊雄窯跡		Ｓ34年			大場窯借り受け創業
30	こうの屋窯跡	松川町　太田	Ｔ年間			井上姓、丸物
31	田中窯跡	松川町　細川谷				丸物
32	中祖窯跡※	川平町　空城	Ｍ初期			
33	嘉戸窯跡(仮称)	渡津町　嘉戸	Ｍ40年			瓦工場創業
	本川窯跡					長徳寺前窯買取、丸物窯改、丸物
	升野窯					本川窯買取、戦時中廃、丸物
34	渡津村勘兵衛窯跡※	渡津村	文化10年頃			
35	渡津村初五郎窯跡※	渡津村	文化10年頃			
36	松田窯跡	渡津町　下渡津	Ｍ25年		Ｓ28年頃	丸物、茶器、花器

※　場所不明の窯跡



第2図　矢源田窯跡調査前地形測量図・周辺の状況　S=1/500

第3章　調 査 結 果

第１節　調査概要

調査は登窯の甲（アーチ部）や煙突の精査から始め、房の中、小口前作業場、通路の順に行った。精査の後、この窯の改修に携わった築窯師、嶋田俊文氏に現地で指導を受けた。この窯を築いたのは父：嶋田一善氏である。大口から６房までは完全に土に埋もれ、房の中には不良製品や窯道具が散乱していた。窯のある土地は６房辺りを境に地権者が違う為、廃業後は大口から６房までが植林の為に壊されていた。

経営者

戦後（昭和22年）、迫田増七氏ら７人で瓦窯１基を新設。迫田氏は昭和24年に木田勝氏に譲り、昭和33年に矢研田弥一郎氏に譲る。同氏により昭和39年まで操業され、その後廃業した。

第２節　窯周辺の状況

（以下４項目については、聞き取り調査に基づく報告である。）

物原（写真図版12）

昔（戦前）は大口の前から今の大田・井田・江津線の道路辺りまで田圃があり、そこに不良品を投げ捨てたことがわかった。窯の西側には水路が通っており、この高さが昔の田圃面である。比高差は３～４ｍあり、今では不良品の瓦・火立て・アゼを使用して基段が作られている。東側の斜面でも不良品、窯道具を再利用して基段が作られている。

平坦面１

登窯と白地小屋の間に位置する。昔、墓があったが登窯を作る時に別の場所へ移し、材料置き場にしていた。

白地小屋跡（写真図版12）

窯の北東の平坦面が白地小屋跡である。

小屋は平屋で瓦葺きである。操業当初は建物の配置が一字形であったが、増築してＬ字形になっていたことが分かった。現在では礎石、土漉し場、土練機の土台、粘土山、石臼などが残っている。

職人の宿舎跡（写真図版12）

窯の東側の平坦面が職人の宿舎跡である。職人は常時二人で、入れ替わりが激しかったようである。平坦面にはヌケ（石見焼きの丸物を窯積めする道具）、石臼が残っている。

第３節　操業の様子

粘土

窯場北側の山では良質の粘土が取れ、現在も山の至る所では採掘跡やそれに関係したと思われる道などが残る。聞き取りでは、ここの粘土は焼き歪みが激しく瓦には適さないので、ハタ（都野津）から持ってきた粘土と混ぜ合わせて使用していたという。

窯積め

房の火格子側の壁には瓦幅でモミツチ溶着痕があり、瓦を最高４～５段積んだと思われる。３段以上は直立段を使わずオイバセ（壁と瓦の間に挟むモミツチ）を使って瓦を積んだと考えられる。道具物（鬼瓦、須山、太鼓、沓巴、切巴など）は一番上の桟瓦が積めなくなったスペースを利用して積んでいた様である。（第５図）

軒桟瓦、駒型雪止瓦、輪型雪止瓦などは瓦同士の間に熨斗（のし）を挟んで焚く。

９房では焚庭に瓦が５枚溶着している（写真図版８）。これは最後に窯を焚いた時に崩れた物である。

窯の改良

窯には必ず改良、修理が必要である。補修箇所には粘土をつけて補強している。寄窯～３房の外壁を外した後を観察すると火格子の焼けた跡があり、窯を縮小させた事が確認出来た。６房～11房の内側は甲とそれ以外の場所でアゼの色やガラス質の溶着が全く異なる。聞き取り調査の際、窯が流れた（崩れた）と聞いたので、甲が崩れて修理した事により、ガラス質の溶着の厚さが違う事が確認できた。聞き取りでは創業当初は現在の９房辺りに小さな煙突があった。火が上がらない（火力が弱い）為、窯を拡張し煙突をつけ直して今の大きさになったという。（写真図版７）大口の中心にトレンチを入れた結果、改良前の大口の床面が確認できた（第４図）。勾配は改良後よりは急であった。

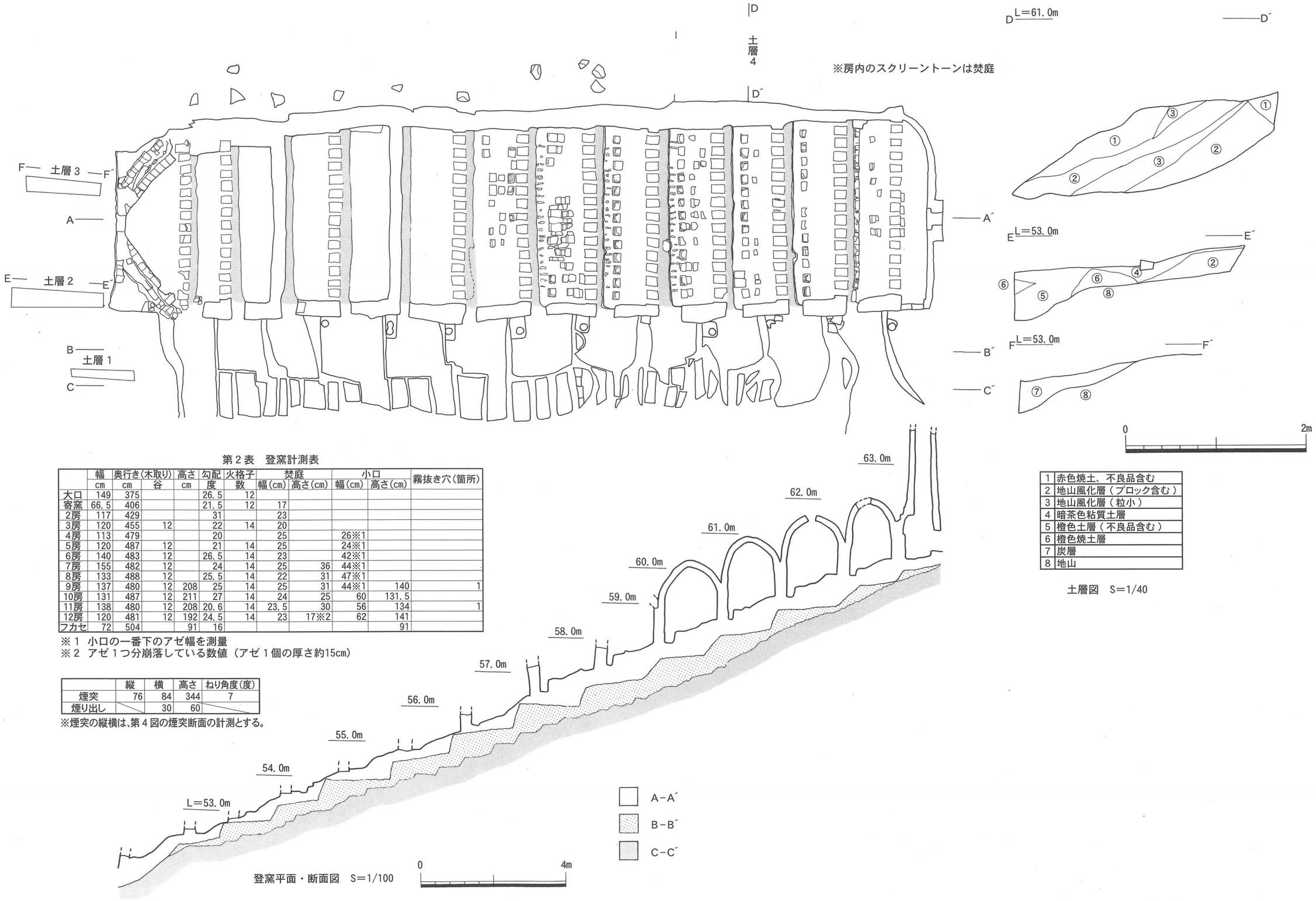
運搬

窯の小口前作業場の通路には白地小屋から大口まで滑車が通り、白地小屋で作った製品を滑車に乗せて各房まで運び窯積めを行った。窯から出した製品は滑車で大口の辺りまで運んで出荷した。木田氏が経営していた時に道を整備し、白地小屋への車での走行を可能にした。

土層について（写真図版13）

大口前の土層２では約50cmの深さから、窯道具、不良瓦などが出土した。大口前から約３m離れた所で物原が始まる事が確認出来た。土層３では地山の上に炭の堆積が確認できた。これは窯を焚き終わった後、大口で燃え残った炭をかきだした跡と思われる。

土層４では不良品の堆積の下に、窯を作る時、地山を削ったと思われる層が確認できた。これは窯体保護の為、人工的にもられた土である。窯の側壁が見えなくなるまで地山ブロックが堆積している。



1	赤色焼土、不良品含む
2	地山風化層（ブロック含む）
3	地山風化層（粒小）
4	暗茶色粘質土層
5	橙色土層（不良品含む）
6	橙色焼土層
7	炭層
8	地山

土層図　S=1/40

第２表　登窯計測表

	幅	奥行き(木取り)		高さ	勾配	火格子	焚庭		小口		霧抜き穴(箇所)
	cm	cm	谷	cm	度	数	幅(cm)	高さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	
大口	149	375			26.5	12					
寄窯	66.5	406			21.5	12	17				
2房	117	429			31		23				
3房	120	455	12		22	14	20				
4房	113	479			20		25		26※1		
5房	120	487	12		21	14	25		24※1		
6房	140	483	12		26.5	14	23		42※1		
7房	155	482	12		24	14	25	36	44※1		
8房	133	488	12		25.5	14	22	31	47※1		
9房	137	480	12	208	25	14	25	31	44※1	140	1
10房	131	487	12	211	27	14	24	25	60	131.5	
11房	138	480	12	208	20.6	14	23.5	30	56	134	1
12房	120	481	12	192	24.5	14	23	17※2	62	141	
フカセ	72	504		91	16					91	

※１　小口の一番下のアゼ幅を測量
※２　アゼ１つ分崩落している数値（アゼ１個の厚さ約15cm）

	縦	横	高さ	ねり角度(度)
煙突	76	84	344	7
煙り出し		30	60	

※煙突の縦横は、第４図の煙突断面の計測とする。

登窯平面・断面図　S=1/100

第３図　登り窯平面・土層図　　S=1/100・1/40

第４節　窯体の調査

連房式登り窯

窯は全長22.8mで大口（始めに焚く所）、寄窯（１房）～12房、フカセ（素焼き焼成室）からなり、細尾根の傾斜を利用して等高線に直行して築かれている。全ての房は火格子穴でつながっており、大口から焚いた火が上の房に上がっていく仕組みである。1200～1300℃の高温で焚く事によって窯が膨張し圧力がかかる為、外壁はアゼを二重に使用して組んでいる。甲（アーチ部）には外圧をかける為に泥（甲土）を盛り、頑丈な作りになっている。構造、規模は表２でまとめている。

築窯材

何種類かのアゼ・モミツチを使用している。シキアゼ（約32×23×９cm）は火格子の土台になるアゼである。アゼ（約15×23×30cm）は火格子、壁、その他色々な所に天日干しの状態で使用する為、大きさには多少の違いがある。アゼに使用する粘土の種類は、火に強いが粘りが弱い物、火に弱いが粘りが強い物の２種類がある。作り方では、型で作る物（アゼの角が丸くなっている）、タタラで作る物（角がある）の２通りの作り方がある。改修する時にはガラス質が溶着していない部分が残るアゼは、アゼの溶着部分を使用しない様に再利用していた。モミツチは粘土の状態で使用して直立段の勾配を調節したり、アゼ同志の接着に用いた。アゼの接合部に刻み目を入れ、接着しやすくしている箇所も確認できた。

大口（写真図版６，７）

窯を焚く時一番初めに焚き始める所で、焚き口は幅約30cmである。土台はアゼを長方形に３段積み上げ、その上にＶ字状にアゼを並べ、数段積み上げている。アゼの間には補強の為、粘土が詰めてある。Ｖ字のアゼは窯の左右で大きさが違う。窯正面から見て右側は大きいアゼを使用しており、左側は窯寸法の微調整の為、小さいアゼを使い、瓦や火立てで微調整している。Ｖ字のアゼが二重になっているのは側壁までで、甲は一重で築き、その上に泥（甲土）を盛る。床は火の登りを良くする為、傾斜をつけて粘土を貼っている。その為、床面では松割木のガラス質が付着している。火の廻りを良くする為、火格子穴は窯の中心ほど狭く外側は中心に向かって角度がついている。大口内で溶着した釘を確認したので、廃材も燃料にした可能性がある。(第４図　大口平面図のスクリーントーンは粘土を表す)

寄窯と房

構造の説明の前に、理解を助ける為に火の特徴を説明する。

ロウソクに火を灯した時、火元は低温で火力は弱い。火元から三分の二当りがもっとも火力が強く高温となり、先端へ行くほどまた低温になっていく。

寄窯と房の構造は、この考えに基づき創意工夫されている。寄窯は温度が上がらず良い製品が出来ない為、小さく作られ直立段も持たない。

２～１２房は火の特徴を考えて、大口付近は弱い火力で温度を上げる為に小さく作り、

中ほどは強い火力を利用し、大きく作っている。煙突付近は火力が下がる為、中ほどより小さく出来ている。窯の勾配も、大口付近は火を溜める為緩勾配に作り、中ほどは早く次の房へ火を送る為急勾配となる。窯の後半部は火力が弱い為緩勾配となる。

また、丸物は窯積めする時に空間が多く空くので、緩勾配でも甲まで火が廻るが、瓦は窯積めする時に隙間がほとんど無く、緩勾配だと火は上方に廻らずまっすぐ火溝を抜ける為、急勾配にして火を甲まで引き上げる工夫をしている。

フカセ（写真図版11）

粘土製品を素焼きする所である。平面形は弓形で、焚庭、直立段はない。釉薬を掛けない物を焼く為、内壁にガラス質は溶着していない。フカセ内で多量の素焼きのハセを確認した。フカセの甲に煙突を付ける為、フカセ中心には23×32×９cmのアゼ（第４図フカセ立面図のスクリーントーン）を立てて築くが、この時にアゼが火格子穴を少し塞ぐ様に置いている。これは、火の廻りを良くする為である。立てたアゼの４段目には煙突の土台になるアゼをねかせて置いている

煙突（写真図版10，11）

フカセの中心にある。煙突をつける事によって大口からの火の引き（上がり）を強くする。煙突の構造は、まず四隅のアゼを交互に組んで、その間を火立てと瓦で幅を調整しながら組み上げている（第４図）。フカセの上に煙突を築いたのは、築窯の手間を省く為である。

ねり（煙突の傾き）の角度は普通１尺上がっての３分から４分内に入る角度で、それを水平器に当てて築く。

嶋田氏は、煙突の四隅の一辺が32cmになるまで煙突を組み上げていった。

小口前作業場（写真図版４）

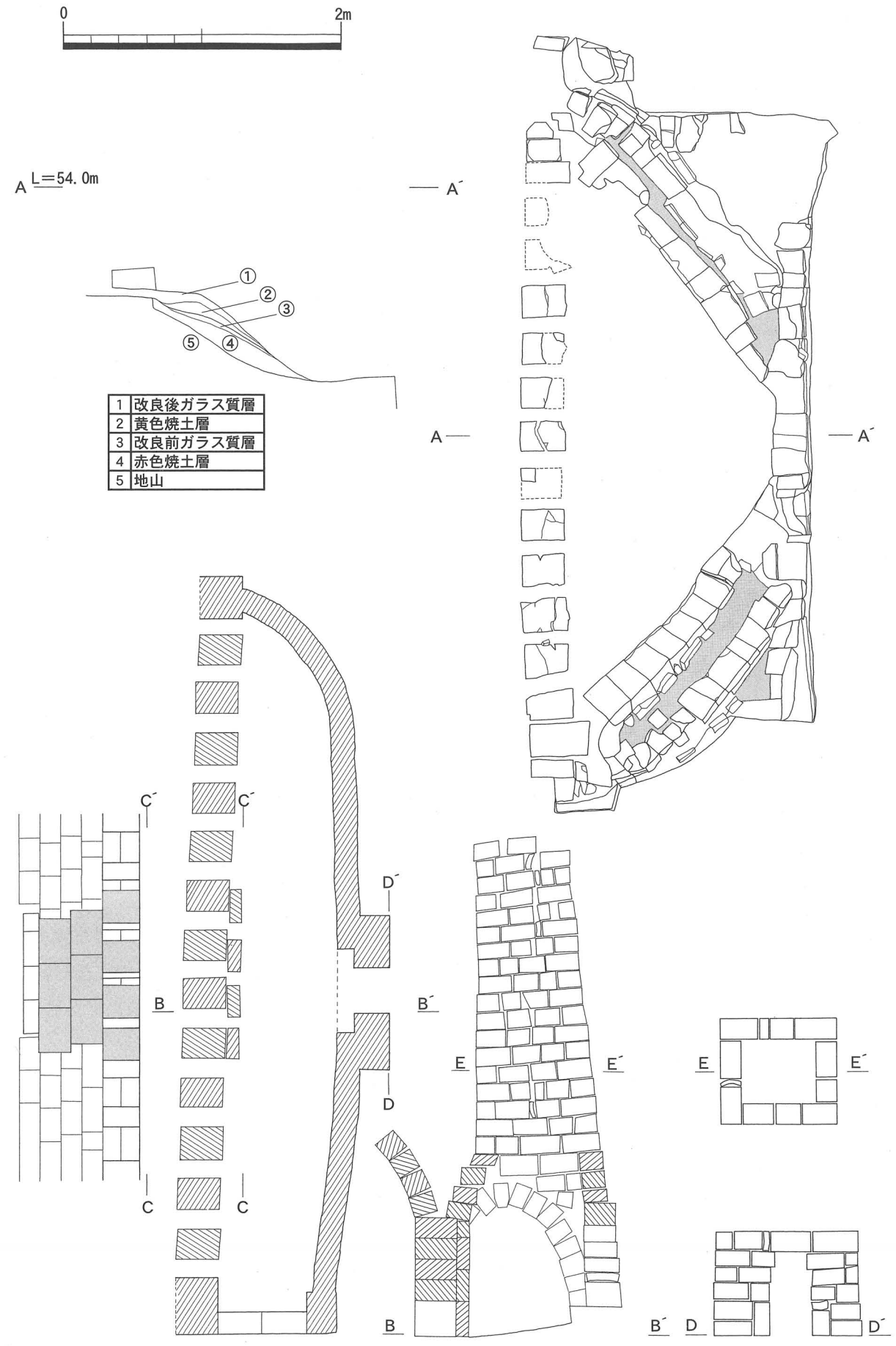
窯を焚く時、薪の投げ入れや瓦の荒分けをする所。小口前作業場は地山を削り出した上に粘土を貼って整地し、作業面として使用した。作業場の補強の為、アゼや火立てを用いて壁を組んでいる。

通路（写真図版４）

登窯の右端には、作業場と同様に地山を階段状に削り出した通路がある。10房付近から上の通路はアゼや火立てを使わず、地山を削り出しただけで使用している。

上屋根（写真図版４）

カマズヤとも言い、登窯全体を覆う屋根である。聞き取りによると窯の上には洋瓦を流葺きに葺いていたと思われる。洋瓦は白地小屋跡付近に多く積まれていたので廃業後、何かに転用する為に運ばれたと思われる。フカセや煙突に使用されているアゼは、雨が当たっても良い様に、耐火モルタル、石灰、ネバ土（粘質の高い土）を混ぜた物を塗っている。上屋を支える柱跡の基礎が各房小口前と房の反対側に、一対づつ置かれている。基礎には石、アゼ、火立てを使用しており、大口よりの礎石にはコンクリートで柱の根元を補強している箇所も見られる。登窯の北西側は補強の為に削り出された地山の土を80～90cmかぶせている。



第４図　大口・寄窯・フカセ・煙突の構造　　S＝1/40

第５節　房内の構造（第５図）（写真図版８・９・10）

直立段

瓦を階段状に積む為の段。22×30×15cmの粘性の少ないアゼを使用している。今回の調査では直立段はほとんど残っておらず、土台が確認できるのみだが、直立段は元々３、４段あったと思われる。直立段は焼けが良い為、廃業後何かに転用される事が多かった為に残らなかったと考えられる。

火溝

直立段の間にある火の通る溝で火の流れを良くする為に、溝全体に粘土を貼って傾斜をつけている。

火格子穴

火が各房に廻る様に房と房の間に開いている穴。穴の大きさはコブシの握り方で決められているが、今回の調査では粘土の収縮やガラス質の溶着などで確認できなかった。釉の溶け具合を見て、火の強い穴には瓦などを詰めて窯全体にバランス良く火を廻らせた。窯の火格子穴は使用している内に房の中心から外に向かって傾いてくる。これは房の熱が外に逃げようと膨張する為に起る現象である。

露抜き穴

窯を焚く時に瓦の水分を抜く為の穴で本焚きする時に塞ぐ。調査では31×14cm程の穴を９房・11房で１穴ずつ確認した。窯を焚く時は小口の上を少し開けて露抜きをしているので、露抜き穴は１つで間に合っていたと思われる。９・11房の甲の上で露抜き穴を塞ぐ為のアゼを確認した。

焚庭

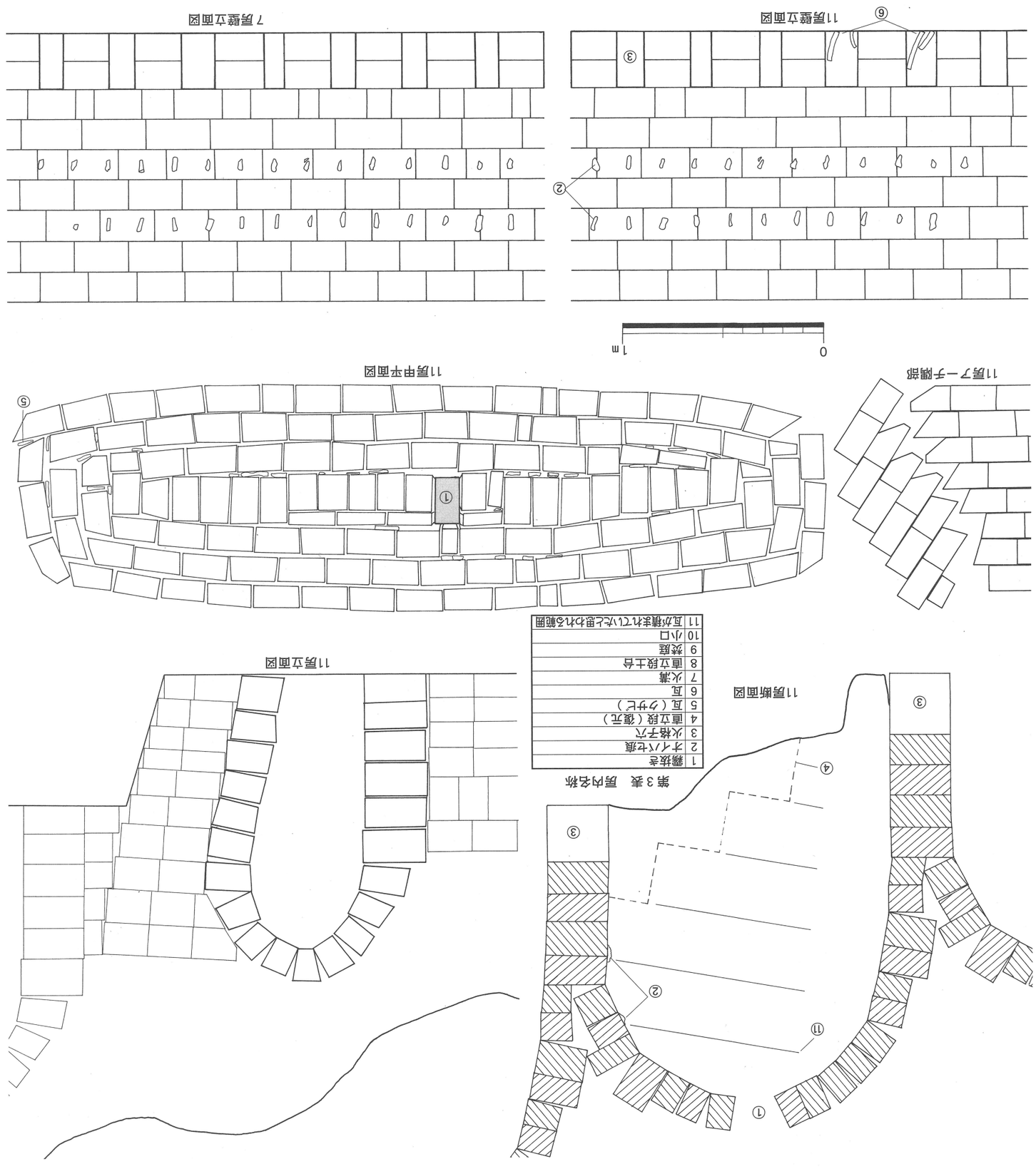
小口から薪を投げ込み焼成する所。６房で薪をぶつけた時に奥壁に開いた穴を確認した。

小口

焚庭のライン状にある。窯は後ろから前に向かって重力がかかるので、窯の強度を強くする為に小口は小口正面から見て右に傾く馬蹄形を呈している（築窯師　嶋田俊文氏の独特の技法）。小口のアーチ部分は、アゼの隅をナタで切り、台形にしたもので組んである。窯焚きの時、小口を塞ぐ泥の跡も確認出来た。

甲

窯のドーム状の部分。甲の上には約５cmの甲土があった。隅の処理は、生干しアゼをナタで切り、アゼ同士が噛み合う様に組んである。甲をアーチ状に組むと、甲の外側には隙間ができ窯の安定を欠く為、瓦片をクサビにして打ち込んでいる。10房の甲の内側にはハケメがあるが、窯を焚く時にふりもの（釉薬が溶け流れ出た物）などが流れて、瓦につかない様に火に強いアルミナをホウキで塗った跡である。



第5図　号の構造　　S＝1/20

第６節　遺　物

瓦　釉薬の種類には来待釉、鉄砂釉の２種類が使われている。釘穴は瓦の種類によって異なる。桟瓦は２つ穴の物が多く、穴の大きさは0.5～１cmで裏は穿孔が不十分な物もあるが、葺師が瓦を葺く時に穿孔している。

軒桟瓦（第6図－1～3、写真図版15）　屋根の軒の部分に葺かれる瓦。20個体出土した瓦当は唐草紋の変化により２種類に分けられた。

袖瓦（第6図－8、写真図版17）　屋根の妻側に葺かれる瓦。左袖に葺く瓦は桟を切り袖板を付ける。右袖に葺く瓦は袖板をそのまま付ける。今回の調査では小袖瓦を確認した。

雪止瓦（写真図版15）　積雪時に雪が屋根から落ちるのを防ぐ瓦。２種類の雪止瓦を確認した。駒型雪止瓦は、頭の部分に駒型の板状の雪止が付いている（第6図－5）。輪型雪止瓦は、頭の部分に粘土を輪型に付けている（第6図－6）。２種類とも桟瓦に粘土の状態で貼り付けて作っている。接合面は切り目を入れて接合しやすくしている。

桟瓦（第６図－７、写真図版16）　瓦を葺く際に最も多く使用される瓦。桟瓦の大きさには規格があり、一坪あたり63枚の瓦を葺くことの出来る瓦の大きさを六三判（ろくさんばん）、53枚葺かれる瓦を五三判（ごーさんばん）という。他に五六判（ごんろくばん）もある。現在は五三判が多く使われている。矢源田窯跡の桟瓦は五三判であった。

熨斗瓦（写真図版15、16）　棟に葺く瓦。大熨斗瓦、割り熨斗瓦の２種類の瓦があり、大熨斗瓦は割り熨斗瓦の下に葺いたり単独で葺くこともある（第７図-10）。割り熨斗瓦は葺く時に割って使用する為、表側中心の凸部に切り目がはいっている（第７図-９）。第７図-12・13は割れた物。

棟巴瓦（写真図版18）　屋根の棟の先端で、桟瓦の上にかぶせ、鬼瓦の土台として使う瓦。矢源田窯跡では切巴、沓巴の２種類の瓦を確認した。第7図－8の紋板では型の貼り合せ部分が確認できる。紋板師は独立しているので、型の特徴で窯元を特定する事は出来ない。

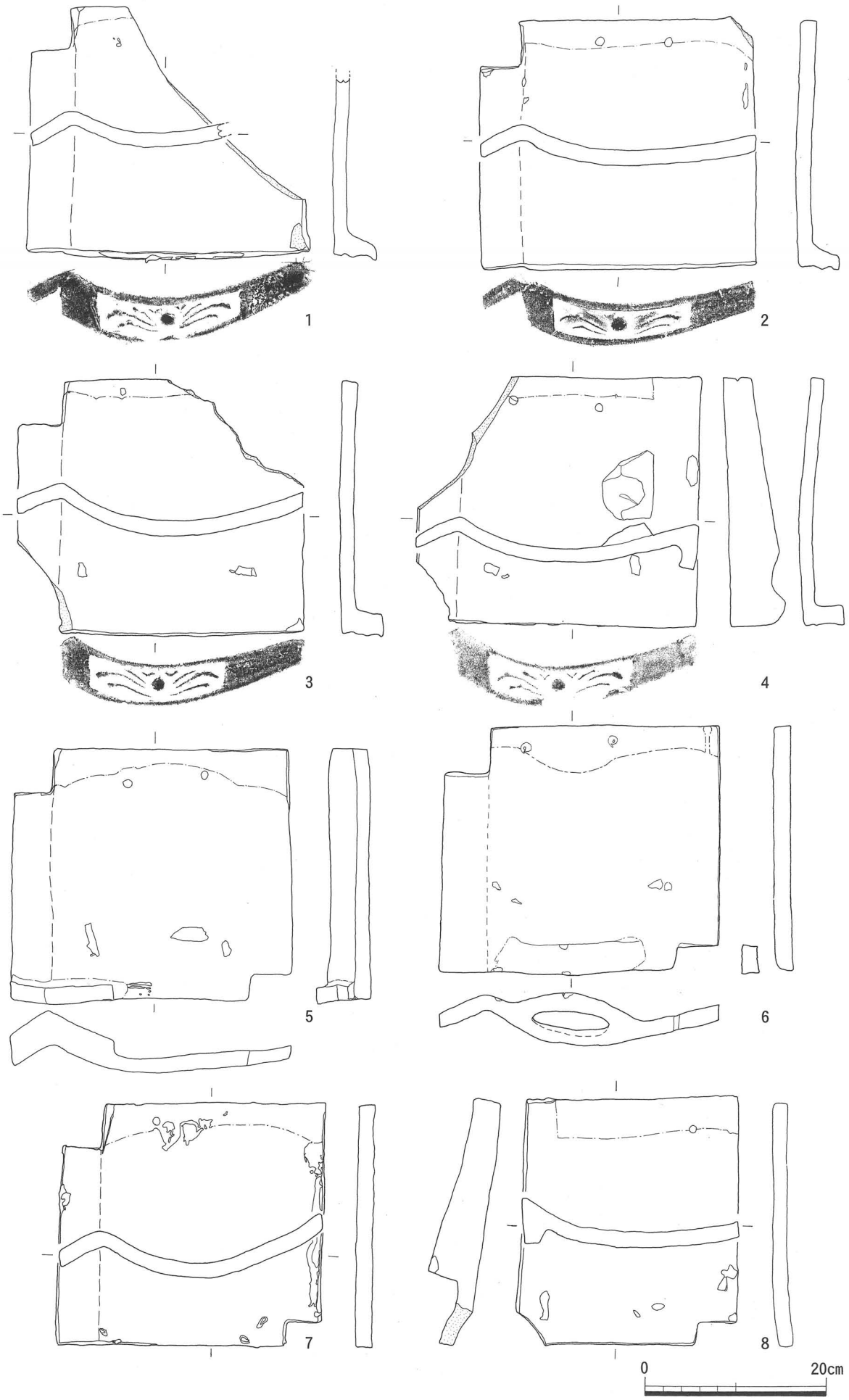
雁振瓦（第７図－11、写真図版18）　棟の最頂部に葺く瓦で、今回の調査では先端に粘土紐を張付けた、ひも付き雁振が確認された。瓦のほぼ中央部には釘穴が１つある。

洋瓦　写真図版17-35は「イ日」と印がある。製造元と規格番号である。「日」は日満洋瓦製作所で作られた物である。写真図版17-36は「Ａ惣㊟△」と印があり、「惣」は丸惣で作られた物である。県内では昭和14年に都野津町の日満洋瓦製作所で初めて洋瓦工場が設立された

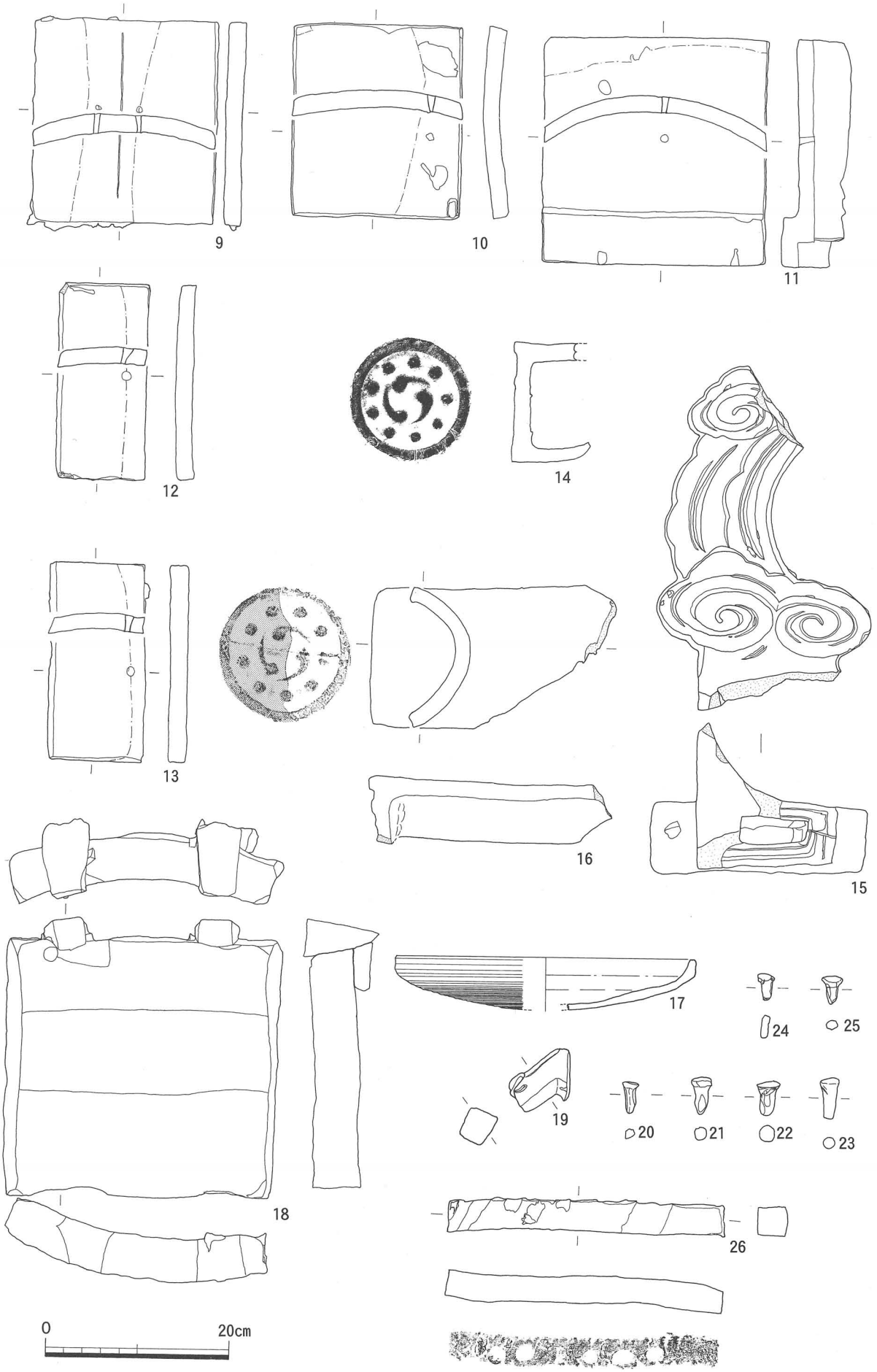
道具物

立浪（第7図－15、写真図版18）　棟に葺く装飾された瓦。熨斗の上に波の立ち上がった装飾を施している。貼り合わせの型作りで、中は空洞になっている。

太鼓（写真図版18）　棟に葺く装飾された瓦。紋板部分には３つ巴紋が一つ確認出来たが、元は３組あったと思われる。窯積めの時モミツチを敷いて太鼓を伏せて焼いた為、モミツチ痕が残る。



第６図　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図１　　S＝１/６



第７図　矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図２　　S＝１/６

陶器

焙烙（第７図－17, 写真図版18） 物を炒る道具で素焼製。物原で確認した。外側にさび釉と思われる釉を掛けた後、カンナで渦巻き状に削り取っている。外側が焼けていないので未使用の物だと思われる。瓦職人は丸物も作れるが、ここの製品かどうかはあきらかでない。

窯道具類

モミツチ（図版７-26、写真図版18） タタラ（土の塊）を紐や鉄線で３×３×30cmの大きさに切り離し生干しする。瓦との溶着を防ぐ為仕上げにマサ砂をまぶす。窯積めする時は瓦の上下にレール状に敷いて使用する。モミツチの上面は瓦と火立ての溶着痕が確認出来た。下面は瓦の溶着痕の間にハセ頭の窪みがある。

ハセ（写真図版18） 瓦積めの時、瓦と瓦の間に挟み瓦同士の溶着を防ぐ物。3～4cmの大きさで釘の形をしている。手捏ね製で、フカセで素焼きしている。第７図－20・23は未使用の物、第7図-21・25は瓦の溶着痕から考えて1回使用した物である。第7図－22は数回使用されている。第７図－24は生粘土をそのまま挟んだ物である。第7図－19はオイバセと言われている。モミツチを短く切った物である。壁と瓦の間に緩衝材として使用している先端にハセ痕が確認出来た。

火立て（第７図－18、写真図版18） 粘土をタタラで約28×28×５cmの大きさに切り、生干しして作る。瓦の一番焚庭側の各段に使用する。瓦に直接火があたらない様に瓦積めの時に瓦の前面に立てて使用した。また地積（一番下の段）の瓦が歪まない様に支えとして使用した。上面にモミツチ跡があるのは、火立てを積み上げていたからである。火立ては変形しない限り繰り返し使用出来る。

鉄器（写真図版17） 瓦外し、鋏（かすがい）、瓦鎌などの鉄製品が確認された。瓦外しは、窯出しの時モミツチとハセから瓦を離す道具。８房小口前作業場ではカマズヤの柱に使用したと思われる鋏が出土した。煙突付近では瓦鎌が確認された。瓦鎌は、成形した後の生瓦をキリガタに沿って切る道具である。

その他

写真図版17－18は小口に敷かれていた用途不明品である。焼成されており厚さ20cm程で両面に格子刻みが入る。足場を固定する為に敷かれていたと思われる。写真図版17－17は房の中で確認した。球形で施釉されている。瓦の焼き具合を見る為の物と思われる。写真図版18－42は小口前作業場で確認した素焼きのカエルの置物である。写真図版18－39は近所の庭先にあったカエルの置物で来待釉が掛けられているが転用品の可能性がある。窯の職人に作ってもらったそうである。置物は火の具合を見る為に置く事もある。ビン類は房の中などで確認したので、廃業後に捨てられた物だと思われる。（写真図版18－40・41）

第４表　矢源田窯跡　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	種別	器種	釉薬	出土地点	備考
6	15	1	瓦	軒桟瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	2	瓦	軒桟瓦	来待釉	物原	
6	15	3	瓦	軒桟瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	4	瓦	大隅瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	5	瓦	駒型雪止瓦	来待釉	物原	
6	15	6	瓦	輪型雪止瓦	来待釉	物原	
6	16	7	瓦	桟瓦	来待釉	９房内	
6	17	8	瓦	小袖瓦	来待釉	物原	
7	16	9	瓦	割り熨斗瓦		房内	
7	15	10	瓦	大熨斗瓦	来待釉	物原	
7	15	11	瓦	雁振瓦	来待釉	物原	
7	16	12	瓦	割り熨斗瓦	来待釉	物原	
7	16	13	瓦	割り熨斗瓦	鉄砂釉	物原	
7	18	14	瓦	沓巴	来待釉	物原	
7	18	15	道具物	立浪	来待釉	物原	
7	18	16	瓦	切巴	素焼き	窯西側	
7	18	17	陶器	焙烙	素焼き	物原	
7	18	18	窯道具	火立て		通路	
7	18	19	窯道具	オイバセ		９房内	ハセ溶着痕１ヶ所
7	18	20	窯道具	ハセ		９房小口前	瓦の溶着痕２ヶ所
7	18	21	窯道具	ハセ		９房小口前	瓦の溶着痕２ヶ所
7	18	22	窯道具	ハセ		９房小口前	瓦の溶着痕４ヶ所
7	18	23	窯道具	ハセ	素焼き	フカセ内	
7	18	24	窯道具	ハセ		９房小口前	瓦の溶着痕２ヶ所
7	18	25	窯道具	ハセ	素焼き	フカセ内	
7	18	26	窯道具	モミツチ		１１房内	
	18	27	瓦	切巴	素焼き	窯西側	
	18	28	道具物	太鼓	来待釉	物原	モミツチ痕２ヶ所
	16	29	瓦	桟瓦		矢源田窯跡付近瓦溜り	
	17	30	瓦	小袖瓦		矢源田窯跡付近瓦溜り	
	17	31	鉄器	瓦割り		４房小口前作業場	
	17	32	鉄器	鋏		６房小口前作業場	
	17	33	鉄器	瓦鎌		フカセ裏	
	17	34	洋瓦	洋瓦	塩焼き	白地小屋跡付近	
	17	35	洋瓦	洋瓦		白地小屋跡付近	印（日）
	17	36	洋瓦	洋瓦	塩焼き	白地小屋跡付近	印（惣）
	17	37	不明	不明		小口前作業場	火の温度を見る物？
	17	38	不明	不明		小口床面	両面、切目が入る
	18	39	ビン	クリームソーダ		９房内	
	18	40	ビン	マミー		大口前	
	18	41	細工物	大カエル	来待釉	森氏庭	
	18	42	細工物	小カエル	素焼き	８房小口前作業場	

第4章　ま　と　め

遺構

登窯は残りが良く、甲も一部残っていたので窯の構造が明確になった。調査では登窯本体のみ精査を行い、その他の施設については聞き取り調査により、大まかな規模・構造を確認した。

登窯は周辺の環境などで特性が変わり、実際窯を焚いてみないと火の廻りなどが分からない事もある為、築窯後改良されるのが普通である。また、登窯は操業時1300℃近く温度を上げる為、粘土の質や火の廻り具合によりアゼがずれたり、崩れたりする。嶋田一族は火や粘土の特性を良く知っており、窯や房の個別の性格を観察し、適切に改修を行い新しく築く窯にも反映させている。例えば、登窯は上から下に重力が掛かる為小口が崩れる事や高熱のため房が中から外に膨張し、甲が崩れる事がある。嶋田一族は、これらの問題を解決する為に、上方からの重力を受け止めるように小口のアーチを窯の後方寄りにゆがませて築き、甲が膨張しても窯が崩れないようにアーチ部隅のアゼ同士を楔型に造り噛み合わせている。矢源田窯跡の場合は、地山のすぐ上に窯がある事によって湿気が多く火の廻りが悪かった為、煙突をつけたり、房を縮小して火の引きを強くする改修が行われた。

以上のような改修や築窯を行った結果、それぞれの房は大きさも築き方も微妙に違っている。

遺物

矢源田窯跡で出土した軒桟瓦の瓦当文様は、均整唐草紋の退化した物で、中心飾りの鈕状突起から左右対称に３枚の退化した唐草が先膨らみしながら外反して伸びており、下から２枚目までは草の先端に３段の波型で葉先が表現されている。３枚目は単純化された先膨らみで、刺弁は「V」形に表現されている。この唐草のモチーフは、市内の石州瓦の古い段階や燻し瓦で見られており、様々な変遷を経た後、現在に至る。矢源田窯跡と同時期の窯跡で確認出来る瓦当紋には、同様のものが良く見られる為、当時の主流紋と考えられる。現段階では確証は持てないが、石州瓦工業組合の設立（昭和10年）と瓦当文様の一本化とは何らかの関連が有るように思う。石州瓦都野津協同組合では昭和28年の段階で、既に現在の標準的な瓦当紋を採用しているが、矢源田窯跡の物と大差は無い。又、森本幸治氏の著した「都野津町瓦工場語録」には第８図のイラストが掲載されており、昭和27年７月には、ほぼ現在主流をしめる瓦当と同様の物が瓦当の一般的な物として認識されていた事が確認出来た。

写真図版16－７・29と写真図版17－８・30で矢源田窯跡の瓦（７・８）と明治頃の作と思われる瓦（29・30）を比較して見た。桟瓦で比べて見ると釉薬の掛け方は29の裏では丁寧に３方向から杓掛けされているが、７の裏では、釉薬が尻側へやや廻り込む程度である。釘穴の大きさは29では、大きめの穴が丁寧に裏まで穿孔されているが、７では、小さい穴が裏まで貫通し切っていない。これは、古い瓦は木釘を想定して開けられるのに対し、新

しい瓦は細い釘や銅線を想定し仕事が簡略化する傾向にある為と思われる。袖瓦の袖板の大きさは、30では大振りに作られ細工も細かいが、８では小振りに作られ細工も簡略化されている。これらの違いで瓦の大まかな時期が分かるのではないかと考えている。これらの特徴は、職人の個人差による所もあるが総体的に見ても作業の退化傾向を示しており、石州瓦の時期を判断する際の１つの目安になると思われる。

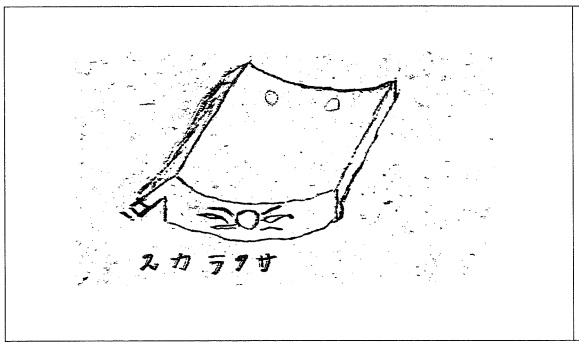
写真図版14の上は矢源田窯跡の近くにある益野家の瓦である。上の屋根に葺かれている瓦が矢源田窯跡で焼かれた瓦である。

今回、矢源田窯跡周辺で採取した遺物と郷土資料館に保管している軒瓦類の瓦当を拓本で掲載した（第10図）。瓦当は全部で29種類確認できた。１以外は施釉瓦である。唐草の形態には様々な変化がみられ、中心飾りに窯元の商標を入れた物などもある（５，８，11，12，20，24，25，26）。これは石州瓦最盛期（明治～大正）頃の特徴で、経営者の増加が原因と思われる。また、社寺等の注文によって瓦当に家紋を入れる事により中心飾りの種類が増えた事も関連している。

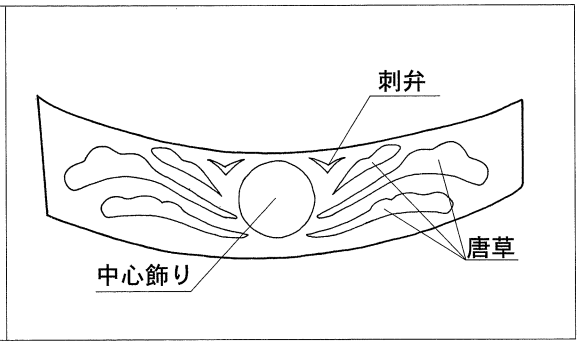
１は波積町、嘉戸氏の蔵で使用されていた燻し瓦である。特注瓦であると言われている。２は波積町にある福城寺の長門に葺かれていた瓦で、文化年間（1804～1817年）の赤瓦である。

14は立浪をモチーフとした瓦当である。

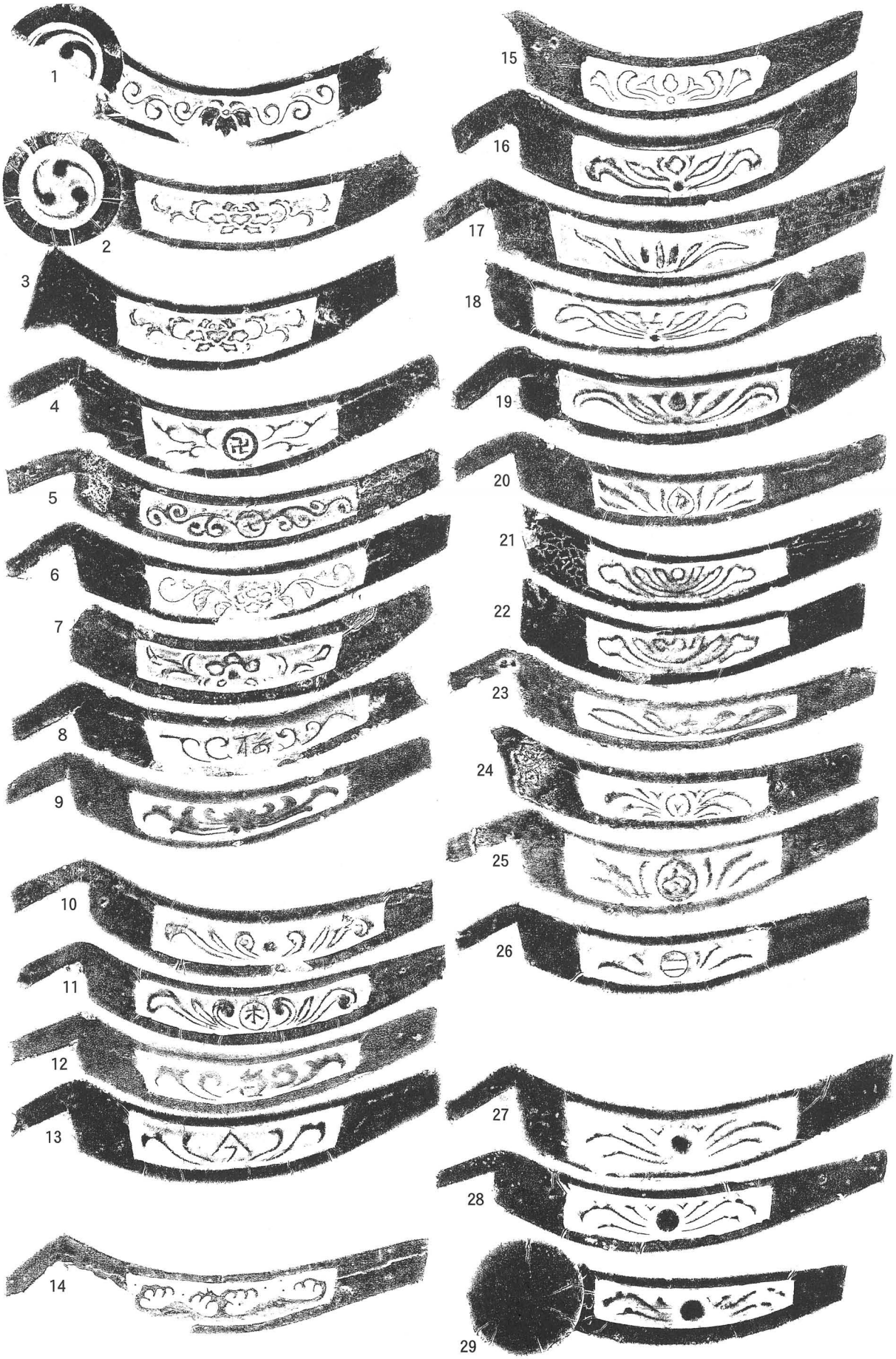
今回掲載した資料は、今まで生産された石州瓦のごく一部で、市内にはまだ多くの瓦当の種類があると思われる。石州瓦を含めた石見焼は、地場産業として大きく発展した。しかし、それと引き換えに古い窯跡はどんどん取り壊されていった。現在残る窯跡は少なく、民家に葺かれている古い瓦も年々その数を減少させている。石州瓦の一大生産地として、何をどう残していくのかがこれからの江津市が取り組むべき課題である。



第８図　「都野津町瓦工場語録」掲載イラスト



第９図　石州瓦基本構成（現代）



第10図　市内瓦当拓本一覧　　S＝1／4

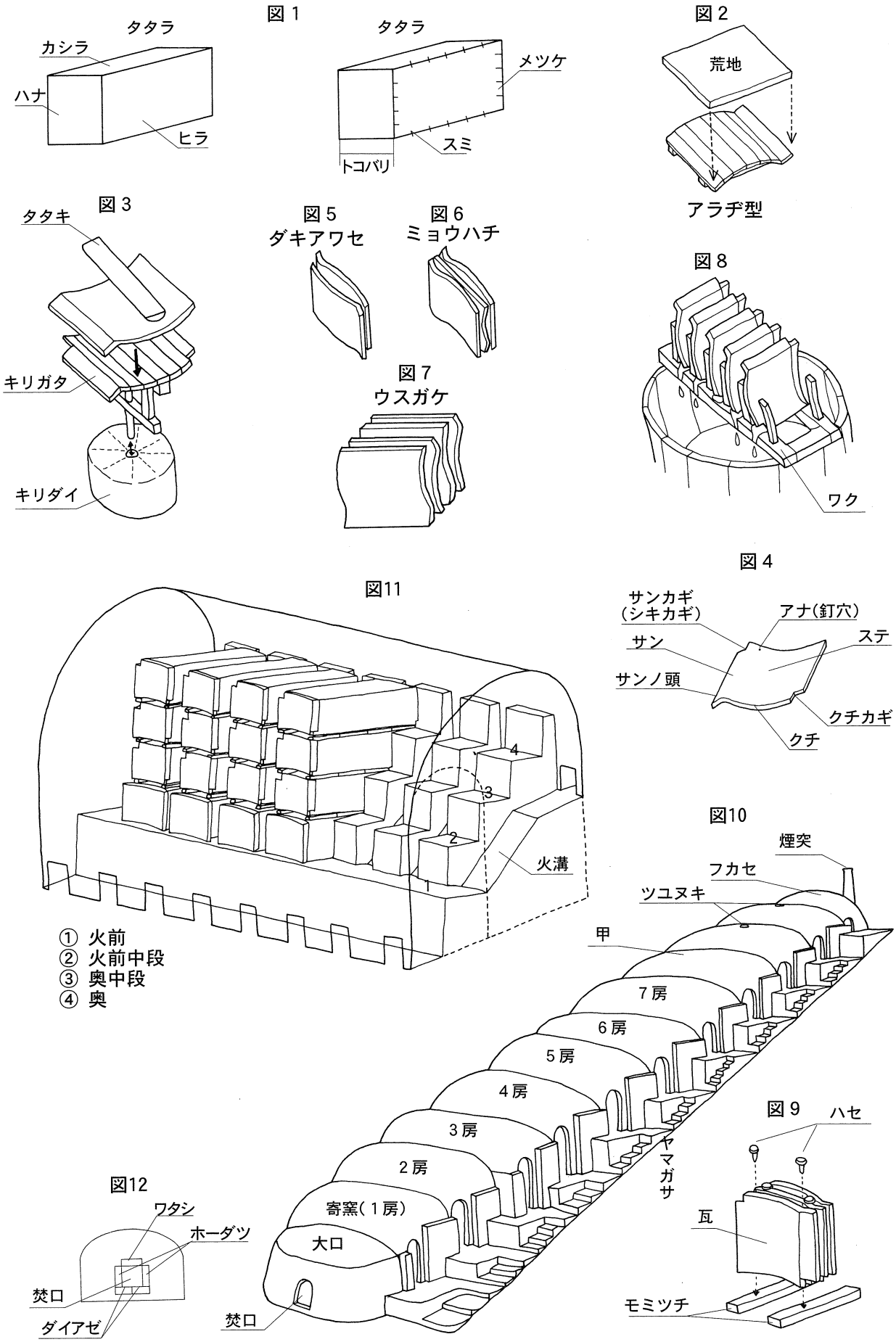


図1
タタラ
カシラ
ハナ
ヒラ
タタラ
メツケ
スミ
トコバリ
図2
荒地
アラヂ型
図3
タタキ
キリガタ
キリダイ
図5
ダキアワセ
図6
ミョウハチ
図7
ウスガケ
図8
ワク
図4
サンカギ
(シキカギ)
アナ(釘穴)
ステ
サン
サンノ頭
クチカギ
クチ
図11
4
3
2
1
火溝
① 火前
② 火前中段
③ 奥中段
④ 奥
図10
煙突
フカセ
ツユヌキ
甲
7房
6房
5房
4房
3房
2房
寄窯(1房)
大口
ヤマガサ
焚口
図9
ハセ
瓦
モミツチ
図12
ワタシ
ホーダツ
焚口
ダイアゼ

第一図　石州瓦図譜

（七）経営、職工、行事

カーラヤ	瓦製造業
カンバ	瓦工場
ヤキワタシ・ヤキウケ	一枚いくらで焼いて経営者に渡す請負の一方法
カチヨウ	工場を借りて経営する事
シラヂウケ	シラヂ一枚いくらでシラヂの製造を請負う。
オヤカタ	経営者
カンキチ	瓦職工見習者
ナカデマ	カンキチの上役
コヤドーシヨク	職工の最上役
トーシヨク	職工長
カマタキ	窯焚き
キリチン	一枚幾らで請負て瓦を切る人
シヨクニン	コヤドーシヨク、カマタキ、ナカデマを総称して云う
モンイタシ	紋板、須山など装飾瓦を専門に作る人
仕事初め	春になって初の仕事日
仲間入り	職工が親方を招いて酒食を共にす
四月入り・小屋入り	親方が職工を招いて酒食を出す旧の四月一日ごろ。
ボンカンジョー	盆勘定。春から盆迄の労賃の支払い
セツキカンジョウ	盆から歳末迄の労賃の支払
カタメノサカズキ	瓦工場では職工と工場主との労働契約は三月～盆迄。盆～冬迄と半年毎に行うのである。この契約が成立した場合、工場主はカタメノサカズキと称して酒食を出す。そして前金をも渡すのである。前金は労働者側から全額を申し入れる。その返済は給料から月々差引かれる。借金の一種ではあるが利子はつかない。現在では形式的なものとなってきた。
カタオロシ	セツキ前に行う。少し酒食を経営者が出す。
ヤマジマイ	冬の採工終了の祝。経営者がふるまう。
カマの御祭	カマの調子の悪い時に神宮を招いて祭をする。

（八）瓦の種類

ヒラ	ノシ	太鼓（タイコ）	鳥休（トリヤスミ）
唐草（カラクサ）	セイガイ	切巴（キリドモエ）	ドーグモノ（道具物）（カラクサ、ソデ、ガンブリ、スミ、ヒモマル、タケマル、雪止）
ソデ（袖）大ソデ・小ソデ	ヒモマル	クツ巴	
ガンブリ	タケマル	紋板（モンイタ）	ウワモノ（上物）（タイコ、トモエ、紋板、須山鳥休）
スミ	雪止	須山（スヤマ）	

瓦の種類は細かに分けるとまだ多数あるが基本となる種類はこの程度である。

（補充）セツキウリ？仲買。仲買人。

都野津で普通に作っている瓦の図譜を作製してみました。皆様方の何かのご参考になれば幸いに思います。

（本文を一部改編して掲載した。図面省略）

昭和二十七年七月　森本幸治

ツユズリ	最前面の瓦が倒れ落ちる事。火前の四段ごろの瓦に多い
ヒカリガクル	水分の多い場合にモミツチが柔らかくなって重みに耐えず瓦がずり落ちる事
ナガダキ（小口の）	下の番のカマを焚く時に上の番のカマの中の瓦が光ってくる事。
カマがワク	その小口を焚き出してから三～四時間ごろ焚いているカマの中の瓦が崩れ落ちる事。一部分が強熱されすぎた場合に起こる。
クミキル	？
ハダガオクレル	下のカマの焚き具合によって一部分が低温でカマの肌に暗色部の存する事
ハダガサメル	風が吹いて冷却される部分が暗色になる事
モミツケバナヲキル	下番のカマを焚いている時に上のカマの火前の瓦の地積みの部と二段のモミツチとの間隔が開く事
クチドロヲヌル	焚き口を塞ぐ事
トメ	焚き終わったカマが冷めるためにカマの内部で音がする事。ピンピン。ドスン
カマナリ	瓦を厚くした様なもの。地積みの瓦のニワリを防ぐために火前の地積みの前におく。
ヒダテ	カマの焚口に用いる素焼のフタ
トガワラ	トガワラを外したり上げたりするに用いる（鉄柄）
カマヒバシ	焚木を小さく割る事
コワリ	熱気が焚口より吹き出る事
ヤガクル	大束？燃料用松材
ダイソク	甚だ焚きすぎた事
タキツブス	

（六）窯出シ、選別

クチヲキル	焚き終わってから瓦を取り出すためにクチを開ける事
カマハズシ	タガネによってカマの中の瓦を離す事
タガネ	鉄製品
クチヲハル	？
クチヨリ	クチ迄出した瓦をクチで大略選別する事
カマダシ	選別場への負い出す事
カワラニワ	瓦の選別場
カザクイ	瓦にヒビの入っている事。急冷の故にとも。土質の故にとも云う
カマソージ	カマソージによって出たものの中からハセのみ拾う
ハセヒロイ	瓦を何級かの段階に選り分ける
センベツ	歪んだ瓦
ニワリ	クチがかけている事。カマ外しの時に矢敗する
クチコゲ	瓦の形真直で色良く音の良いもの
一等品	瓦の形直で色少し落ち音の良いもの
二等品	形直で色少し落ち音少し落ちたもの
三等品	形歪み色悪く音稍良
四等品	クチコゲで音冴えず
等外・ヤマユキ	瓦が互に密着して離すことのできないもの。廃品
ヒイツキモノ	歪みの甚しい瓦
チヤンバチ	表面の粗糙なもの。
ジガアレル	ハセ、モミツケが外れる時にできた傷跡へ削炭（鉄砂瓦へ）ベンガラ（赤瓦へ）をつけて見よくする（ジズミ）
ケシヨー・スミツケ	平瓦五枚一組としてワラ縄で結ぶ事（補充）地積み
ケツソク（結束）	

ツミドリ　クスリガケしたシラヂをそのまま、積み重ねる事。場所の狭い場合にする
ホシ　アラヂやキリタテが寒さにより中の水分が凍って表面にできた星形の氷
ウロコ　右記の称であってウロコ形になったもの

（四）窯

カマ　窯。現在は登り窯を普通とする。
ミギガマ　カマズミする場合に小口が右側にあるカマ
ヒダリガマ　右記の反対
キアゲ　燃料となる松割木をカマに負い上げる
ダイソク　燃料となる松割木
オーイレ　瓦素地をカマ運び入れる事
カマズミ　瓦素地をカマの中に積み上げる事
ハセ（図9）　瓦と瓦とが粘着しない様に間に挟ませる。一度素焼きしたもの。
モミツチ（図9）　瓦の下において瓦の密着を防ぐ。粘土のまま用う
窯場の図（図10）　ハセ・モミツチ共に瓦の粘土より砂の多い脆い粘土を用いて作り、瓦が焼けてから瓦と離れ易くする
内部略図（図11）
ドウロ　ゾウリ　モーロ　ドーロはモミツチが焼けて廃品となったものを云う。
オイバセ　カワラを積む時に用いる粘土。モミツチより柔い土を用いる
モミツチズナ　モミ土につける砂で細粒の砂を用いる。アゼ、瓦などとの粘着を少なくする
メズナ　モミツチ砂として用いる。極細粒砂。有福村産
ツバミバセ　最前面に積んだ瓦が前に倒れるのを防ぐために柔い土を挟む。その土
ウワダン　四段目五段目ごろを云い道具物（カラクサ、トモエ、オニ瓦など）をつむ。
ノヘナ　積んだ瓦が奥へ傾いている場合
キユーナ　つんだ瓦が垂直な場合
ゲタをハカセル　道具物を積む時、高さを他の瓦との粘着を防ぐ様に少し高くするために道具物の下にモミツチをしいて高くする
クチヲカケル　クチを焚く穴を残してアゼで大体ふさぐ
ワタン・ホーダツ・ダイアゼ　クチアゼ（図12）

（五）窯焚き

ツユダキ　カマの五番ごろから末迄各小口毎に火を焚いて水分をぬかす
ヌクメ　大口で徐々に火を焚く事。四、五時間～十時間
ホンダキ　大口を強く焚く事。十六時間～廿十時間
ナカダキ　ホンダキにかかってから四～五時間程度のころ
コクベ　少しづつ焚く事
オークベ　ホンダキの終わりごろ殊に強く焚く事
アク　オキ（燠）の事
コグチヲタク　大口が焚き終ってから各窯の小口を下段より順次に焚く事
ハシレル　温度急上昇の場合瓦が破損する事
サエル　温度上昇してカマの中が黄白色になる事
アガル　焚きが終わる事
ハナトビ　焚くのが強すぎた場合とか積み方が垂直にすぎる場合、

キリタテ　切り終わったもの
キリタテ・キリ場　切る場所
ウチギリ　型より内側に傾いて切る事
ソトギリ
アナアケ　カワラガマの柄の先端につける瓦の穴あけ道具
瓦部分名称　ステ・サン・クチ・サンノアタマ・サンカギ（シキカギ）・アナ・クチカギ（図4）
マキオロシ　カマに水をつけて切った跡をなでて切り跡の小穴をつぶす事。（クチの場合）
リヨウナデ？
カタナデ？
ナデヲカウ　切ったアラヂをカマでなでる事。肌目が細くなって外観がよくなり、釉薬がのり易くなる。
ユビナデ　角を指でなでて滑らかにする。

（三）**乾燥・釉薬ガケ**

スクマセル　切った瓦を一日位置く事
ホシニワ　干し場
ウラゾクロイ　乾燥より生じた裏の亀裂を粘土でふさぐ事
ステガイヌル　ステが歪む事
カヤス（モドス）　干し瓦をひっくり返す事
ハンシラヂ　キリタテが半乾きのもの
タナガケ　日干したものを乾燥棚にかける事
ダキアワセ（図5）
ミヨウハチ（図6）
ウスガケ（図7）
アツガケ　ウスガケの瓦の如き並べ方だが、各瓦を二枚づつにする。

以上のダキアワセ・ミヨウハチ・アツガケ・ウスガケは干す瓦の乾燥棚への並べ方
シンガアオイ　乾燥中のシラヂの深部が未乾で湿った色をしている事
シブガウク　乾燥により斑点のできる事
キレ　亀裂
トマ　ワラ製品でコモに似ている。棚の外側に張って強風や雨のしぶきを防ぐ
タナオロシ　シラヂをシラヂ小屋に積むために下ろす事
アクタ　シラヂを積むための敷物。ワラ屑
シラヂ　乾燥した瓦素地
オシメゲ　積んだ圧力でシラヂのこわれる事
クスリ　釉薬
クスリガケ　釉薬をシラヂにかける事
ワク（図8）　クスリガケを終わったものを置いて釉薬を小時滴らす道具
クスリジヤク　クスリガケするシヤク
ハンギリ　大桶
ブンジ　撹拌器具
クスリガキズム　釉薬が沈澱する事
トビガトブ　釉薬が乾いてからの小さい亀裂形。釉薬の濃い場合に多い
フリドリ　クスリガケしたシラヂを振って、しづくをたらしておく事
ムコウドリ　ワクにあるクスリガケしたシラヂを取る事
ヂバシリ　リレー式にものを運ぶ時最初の物をとりあげる人？
ヂヲキル

イレフネ　土を槽に入れる事。
ジョレン　土をフネに入れてそれを山鍬で小さく削り混ぜる事。現今、都野津では土練機を用いるから廃れた。
ボーズ　坊主。ジョレンした土を坊主形にして、フネより取り出す。その坊主形の土
ボーズをカヤス　ボーズを針金で三分位の厚さに切って他へ移し、ふみつけて練る
タタラ　ボーズを針金で切って巾尺二寸、高さ三尺位、長さ十二尺位の粘土の垣の如きものに築く。この土塀の如きものをタタラと云う。これを適当に切ってアラヂにとるのであるが現在都野津に於てはアラヂ機を用うるので、これを作るのはアゼを作る時だけである。（図1）
タタラが槽の方へ傾いている。
オカノ方へ傾イテイル。　前記の反対側に傾いている場合を云う。
メツケ　タタラの高さを区切る印（図1）
トコバリ　タタラの巾（図1）
スミ　タタラの長さを区切る印（図1）
ヒラ　タタラを一定の寸法にしてその寸法より余った土で、両横の部分。（図1）
サゲブリ　タタラの垂直を見る器
セギ　タタラの定規を止める竹製品
ヂョウギ・タテヂョウギ　タタラに用う。
テナワ　土を切る針金
ス　タタラの土の隙間
ジョレン以下ここ迄は、現在都野津に於ては、特殊の場合以外行はれない。
フネ　土を土練するために入れておく槽。地面を尺五寸位の深さに掘った四角なもの。底や囲いに板が張ってある。この中に土を入れ適当に加水して使用に良い柔さにする。
ドレンキ　土練機。土を練る機械
アラネリ　第一回目の土練
シアゲ・二番練り　第二回目の土練
アラヂキ　アラヂ機。アラヂ大略瓦形となった粘土
アラヂトリ　アラヂを作る事
フリコ　シラヂの破片を粉にしてフルイでふるったもの。アラヂ相互の粘着を防ぐためにアラヂの間にふる。
テナワ　土を切る針金
アラヂ型（図2）　昔はこのものでアラヂにしていたが、現在はアラヂ機から連続して出てくるアラヂを受けるものとなった。
アラヂヲワル　アラヂ機よりアラヂが二枚づつ出る。その一緒になっているのを離す事。
アラヂをカヤ(エ)ス　アラヂをひっくり返す事
アラヂをヨセル　一まとめにする事
シヨリバ　瓦製造場（カマ場を除く）
ヒトミ　シヨリバの窓。上・下
ヒトミイタ　ヒトミを被う板
マクリ　アラヂがよせてあるものの廻りをまくもの。ワラ製品
タタキ　アラヂを叩く木製品。桜の木が良い。これで叩いて土を固める。
カワラガマ(カマ)　アラヂを瓦型に切って全て瓦の型にする道具
キリガタ（図3）　キリ落した粘土
キリクズ　アラヂがキリガタに不足する場合を云う
キリシロガナイ

都野津町瓦工場語録

初めに

都野津の瓦工場で用いている言葉を集めてみました。これによって学者に調べて頂くと都野津或いは石見の製瓦技術が日本のどの辺の系統であるか解かるかもしれません。

或いは不明に終わって骨折り損になるかもしれませんが、都野津瓦の歴史を調べるためにはあらゆる術をつくしてみなければなりません。この意味で皆様方の御協力を御願い致します。

この冊子の中に誤りやぬけていることがありましたら、ぜひとも御教へ下さい。

昭和27年7月　森本　幸治

（一）　採土、運搬

ツチヤマ　土山。瓦用粘土を採掘する場所。転じて採土の意にも、用う。

ドロヤマ　泥山。右に同じ。

ウワヤマ　上山。瓦用粘土上層の不用な砂土。

マサ（マサツチ）　粘度小でポツリポツリした土

マサズナ　マサ砂。マサ土の砂が、かったもの。

ヒメマサ　姫マサ。マサ砂で砂粒小なるもの。

アラマサ　荒マサ。マサ砂で砂粒大なるもの。

ネバ　粘度大なる土

トラ　？

ダコ　？

ハサリ　粘土層間に狭在する不用物。砂層。褐鉄鉱層。

シキ　普通に採土され得る粘土層の最下底。不用な粘土、又は砂がでることが多い。

ショウヂ　小路？前年採土した隣を採掘する場合には前年採土して跡を埋めた境界より、或隔りをおいて採土する。その隔りの土。大体一尺。

シニヤマ　死山。採土後穴埋めした部分。転じて一度採土しておいた土全部をも云う。

イキヤマ　生山。土山の未採土の部分。

ズリ　崩れ落ちた土

土のハダヤ　土の小隙間

オトコシ。　木、又は鉄の光った棒。直径三分～五分。長さ尺～尺五寸位。これを土に打ち込み、土のハダを大にして土を崩す。

オトコビヤク　男日役。右の名称は採土以外の労働にも普通に用いる。日やといである。

コマ　オイコに土を一荷（容積。チリトリ二杯。重量未乾燥の瓦（アラヂ）六～八枚分―一枚、一メ―）入れて土置場へ負うて運搬しコマと称するもの（小さい厚紙に工場印を押したもの）を一枚貰ふ。この枚数により賃を勘定する。この方法による運搬法をコマと云っている。

ヒヤリ　日給で運ぶ人夫。運搬に限らず極めて普通に用いる。

坪ウケ　六尺立方の土を一坪として採土運搬を請負うる。

（二）瓦の成形

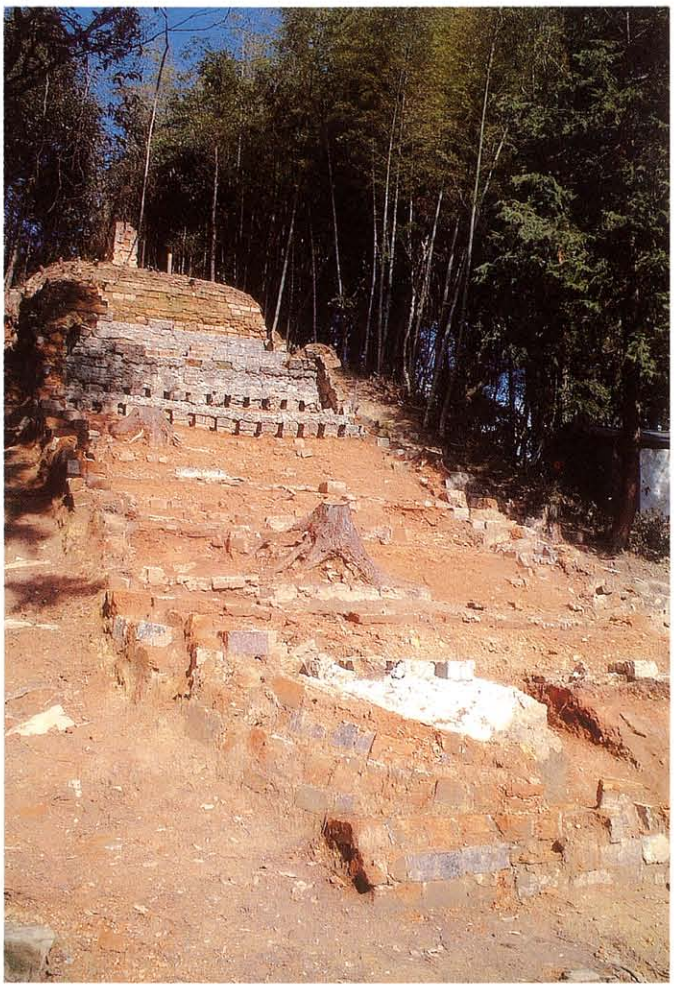
ドロガネル　採った粘土が雨露によって砕かれ、又不用分が流されて使用に良い状態になる事

登窯全景（正面から）

写真図版 2

波積町本郷遠景

調査前登窯（正面から）



登窯完堀

5房目（正面から）

登窯（正面から）

登窯通路（大口付近から）

登窯通路（７房付近から）

窯北西側礎石（北西から）

７房小口前作業場（南から）

9房～煙突（南から）

8、9房裏側（北から）

大口正面

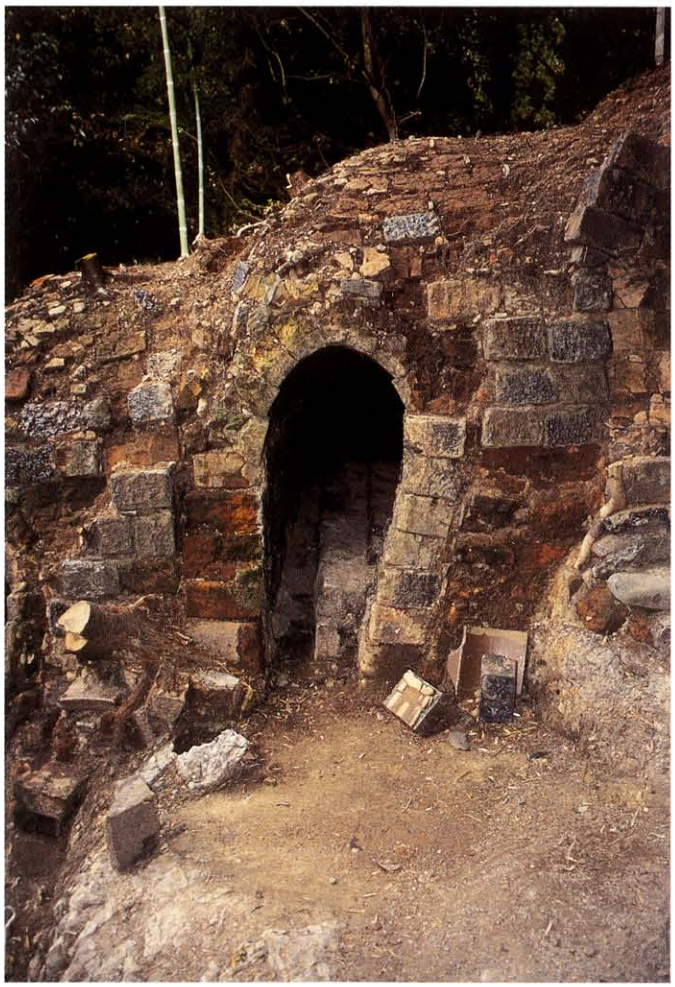
大口火格子穴

大口粘土検出状況

2 房縮小前

2 房縮小後

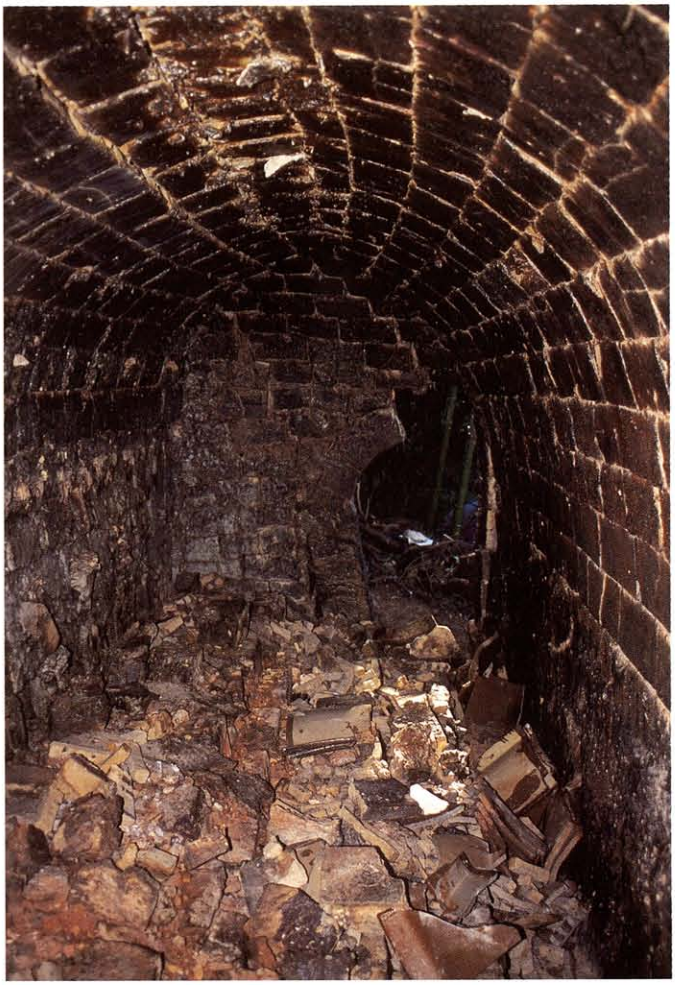
6 房焚庭奥壁



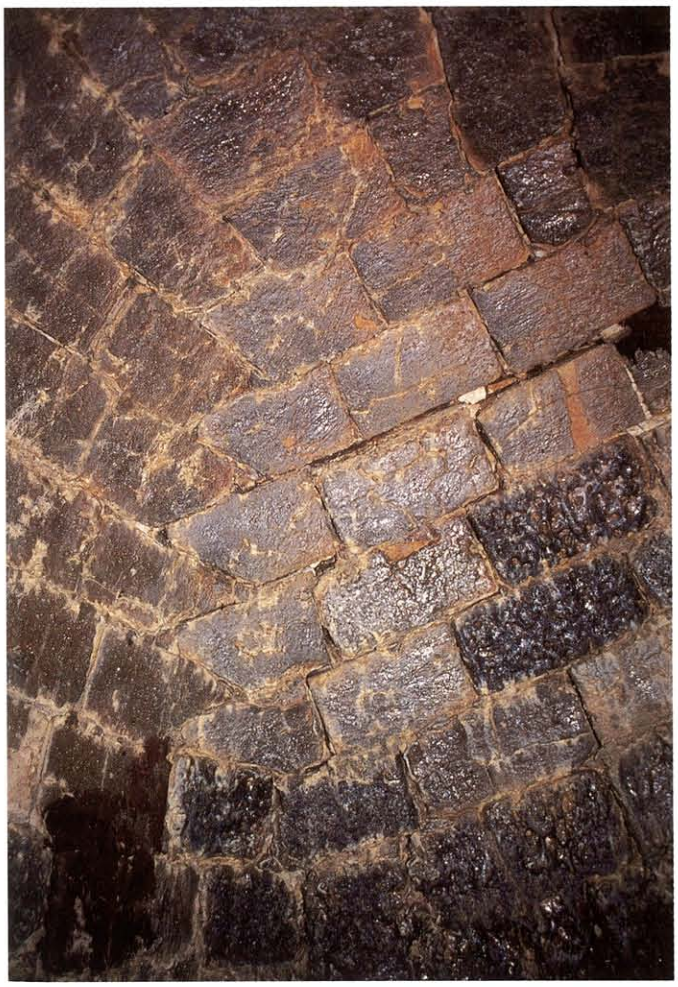
10房小口

9 房内（奥から）

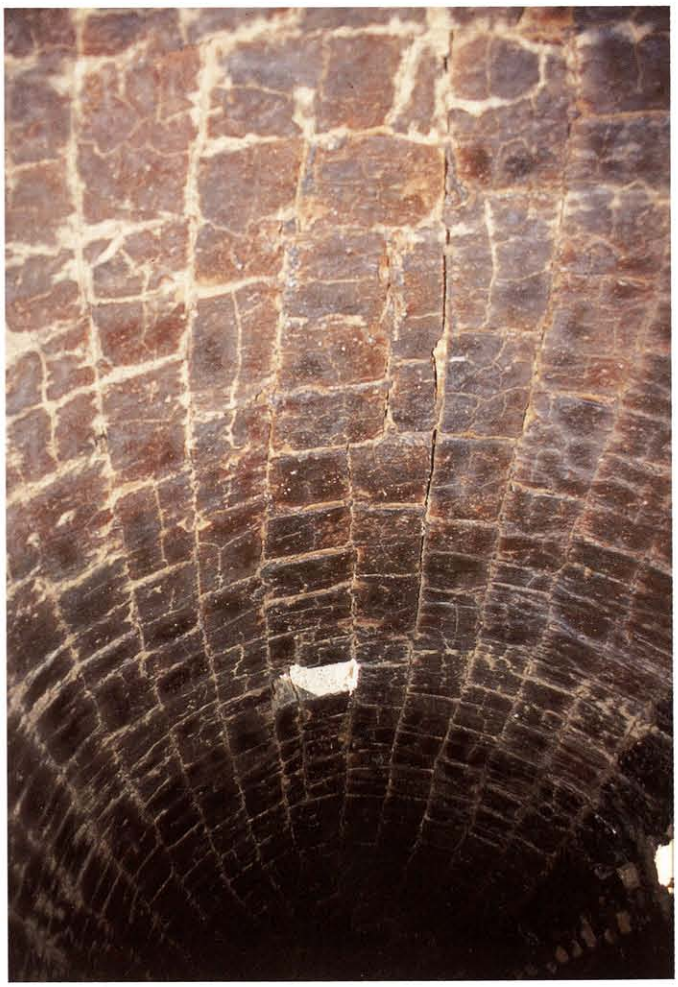
9 房内（小口から）



9 房内調査前（奥から）



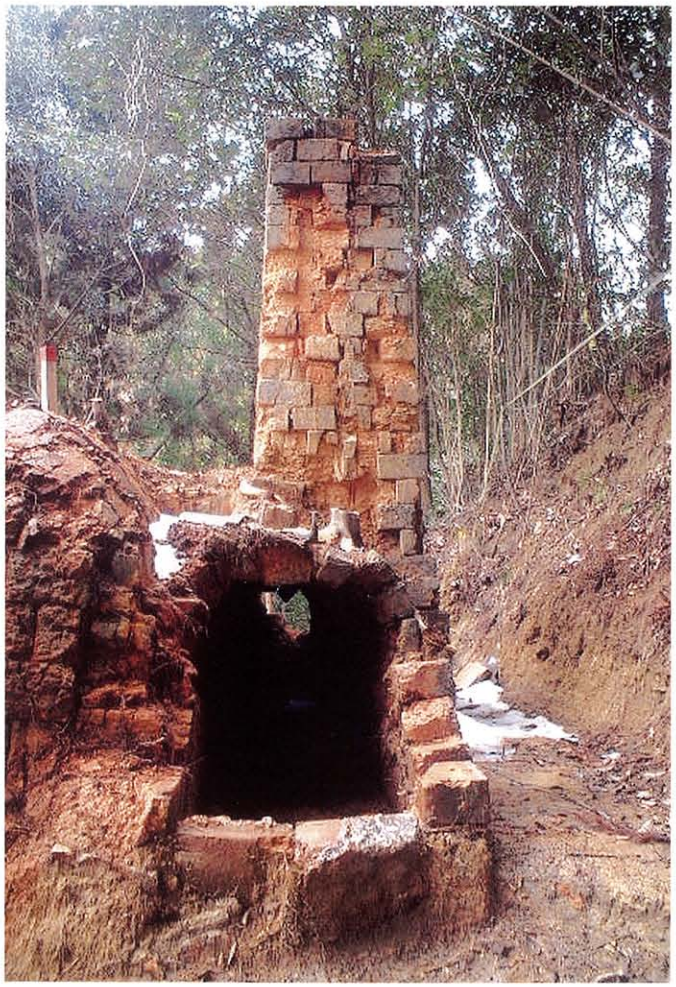
9 房甲端部組み方



11房甲内側

11房露抜き穴

煙突（西から）



煙突、フカセ（南から）

煙突下、炭掻き出し穴

フカセ内部

写真図版 12

白地小屋跡（南西から）

職人の宿舎跡（北東から）

物原壁（北東から）

大口土層

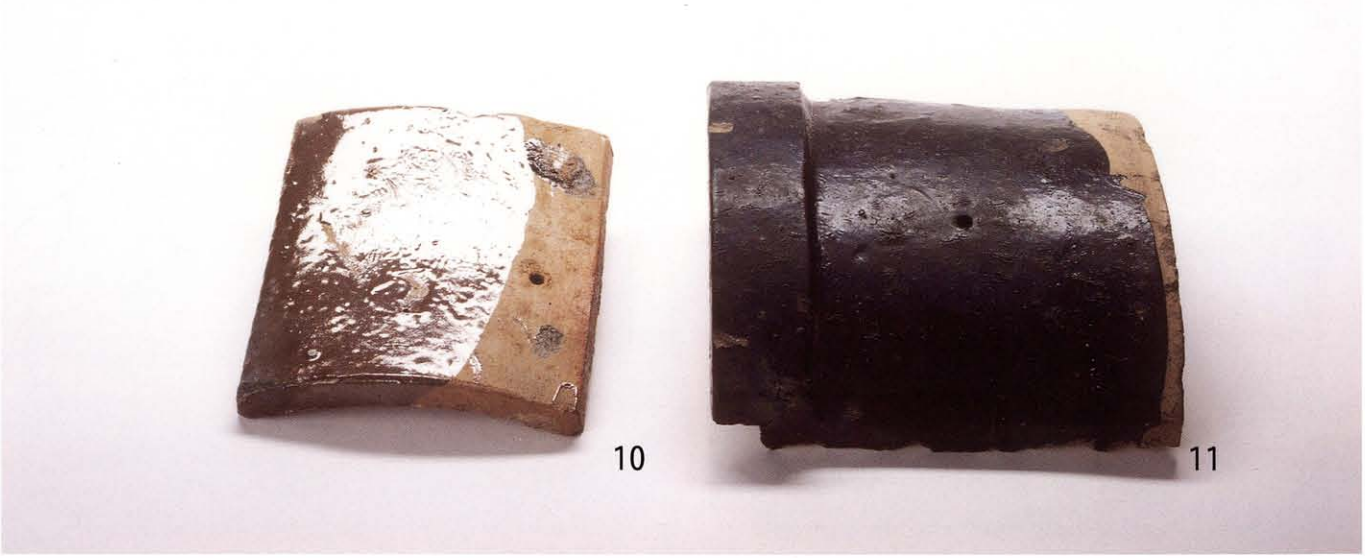
土層 2

土層 4

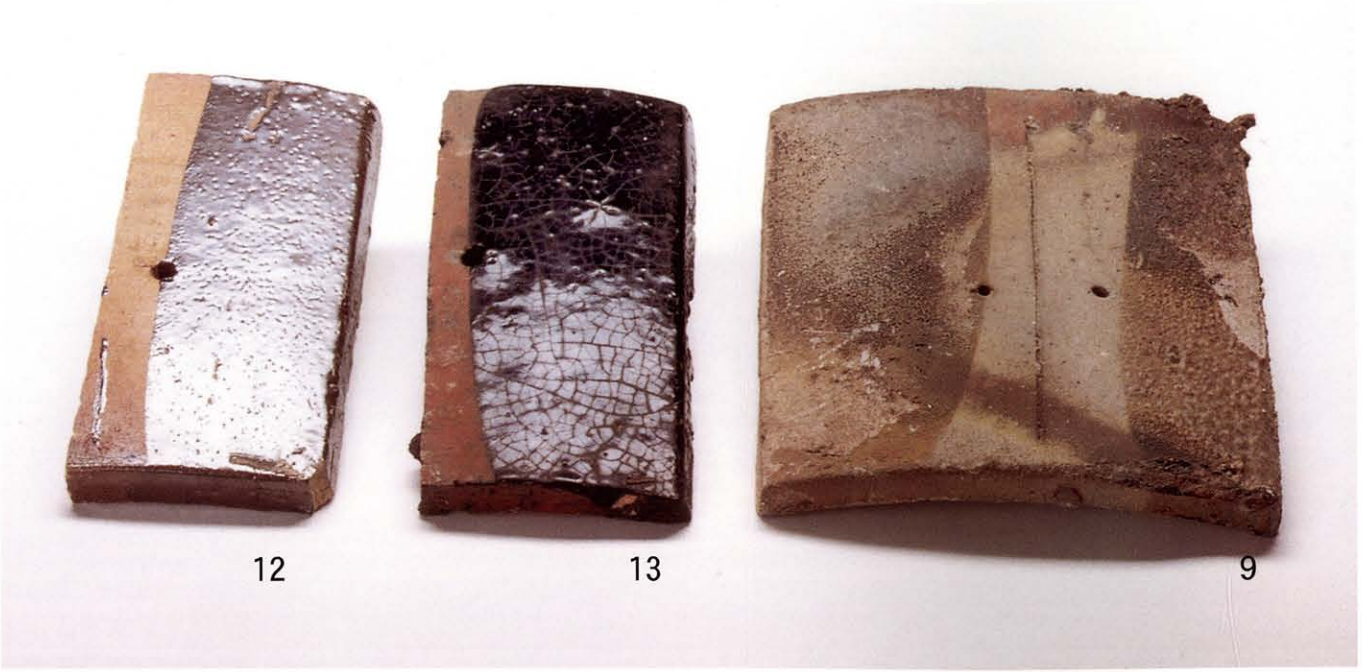
益野家屋根

益野家瓦

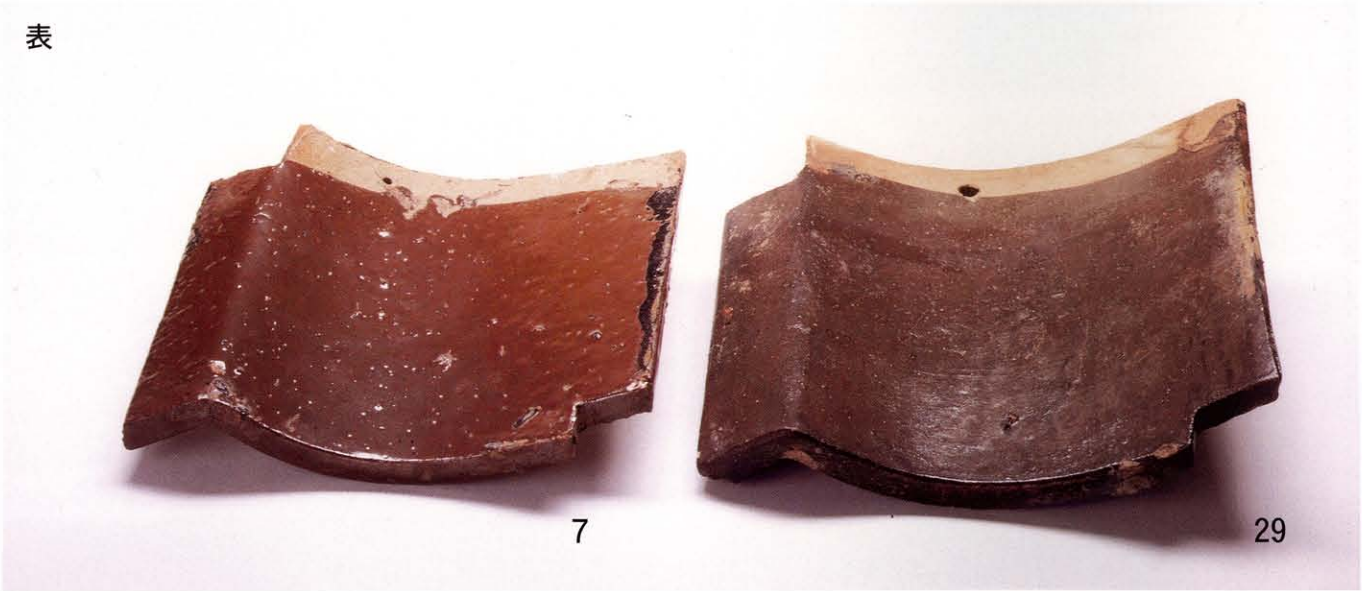
作業風景



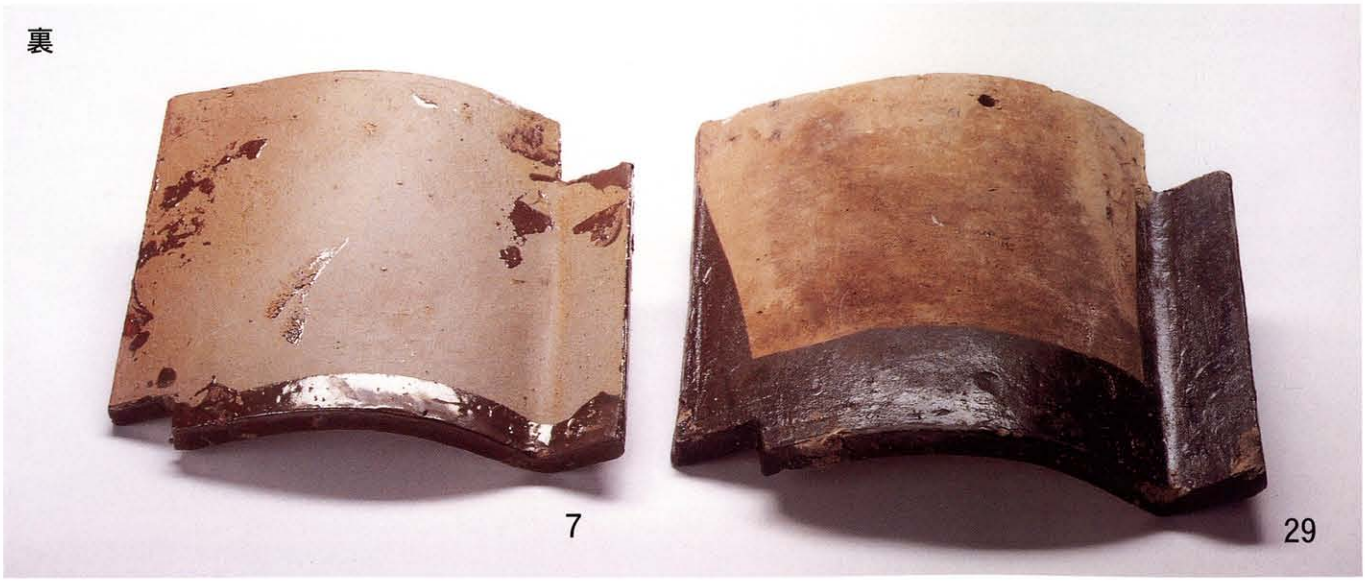
矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物 1



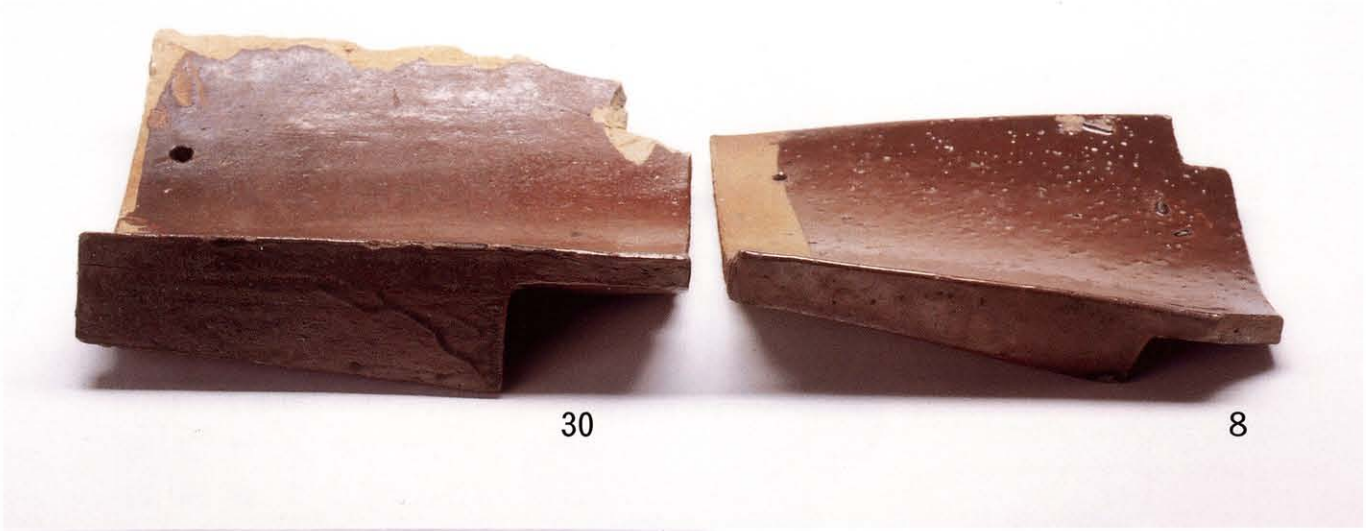
表



裏



矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物 2



矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物 3

矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物 4

報告書妙録

ふりがな	やげんたかまあと
書名	矢源田窯跡
副書名	波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び県道江津・井田・大田線付替え工事に伴う文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	梅木 茂雄・澤津　孝
編集機関	江津教育委員会
所在地	〒695-0011　島根県江津市江津町1525　TEL 0855-52-2501
発行年月日	西暦　2003年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢源田遺跡	ごうつしはづみちょう 江津市波積町 ほんごう 本郷	32075	D97	35度 1分 51秒	132度 19分 43秒	20021002 ～ 20030228	249㎡	集団移 転地造 成工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢源田遺跡	窯跡	近代	石州瓦窯　1	石州瓦	

矢源田窯跡

発行　2003年３月
編集　江津市教育委員会
　　島根県江津市江津町1525
印刷　柏村印刷株式会社